JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	依存関係生成モデルを用いたソフトウェア成果物の変更波及解析支援
Author(s)	小谷，正行
Citation	
Issue Date	2008-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/4198
Rights	
Description	Supervisor:落水浩一郎，情報科学研究科，博士

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

博 士 論 文

依存関係生成モデルを用いた
ソフトウェア成果物の変更波及解析支援

指導教官　落水 浩一郎 教授

北陸先端科学技術大学院大学
情報科学研究科情報システム学専攻

小谷 正行

平成 20 年 3 月

要 旨

本論文では，UML1.5 の依存関係を解析し変更波及に有用な要因を抽出することにより，変更波及追跡に有用でかつ自動生成可能な基本依存関係 (情報共有，同一概念，生存従属，コピーの 4 つ) を新たに定義する．また，開発プロセスのフェーズと，各フェーズに含まれる UML 図面群を入力とし，照合規則，付加規則，選択規則から構成される依存関係生成モデルに従って，基本依存関係を自動生成する手法を提案する．基本依存関係が UML 図および，その構成要素間に付加されることによって，基本依存関係の追跡による変更波及解析が可能になる．エレベータ制御システムと ATM システムの事例研究を題材として，基本依存関係の自動生成とそれを利用した変更波及解析結果を報告することにより，本論文で提案する手法の有用性を示す．また、この手法を Eclipse プラグインとして実装したツールを紹介し、その拡張プラグインとして実装した UML 図式要素に対応する Java クラス群抽出ツールを紹介する。

目 次

1 はじめに 2

1.1 背景 2

1.2 目的 3

1.3 本論文の構成 5

2 基本依存関係 6

2.1 UML1.5 版のメタモデル要素 “Dependency” 7

2.1.1 Abstraction 7

2.1.2 Binding 8

2.1.3 Permission 9

2.1.4 Usage 10

2.2 設計者が暗黙的に生成する依存関係 10

2.2.1 コピーされたもの 11

2.2.2 包含関係の記述 11

2.3 基本依存関係の定義 11

3 照合規則 14

4 付加規則 17

4.1 生成モデル要素の定義 17

4.1.1 情報共有 18

4.1.2 コピー 20

4.1.3 同一概念 21

4.1.4 生存従属 23

4.2 付加規則の定義 24

5 選択規則 26
5.1 選択規則の定義 27
5.2 プロセス情報 28

6 依存関係の自動生成 29

7 変更波及解析の方法 31

8 評価 33
8.1 評価対象の特徴 33
8.2 評価のための基礎データの作成と評価方式 34
8.3 自動生成された基本依存関係の精度 37
8.4 ある概念に関連する部分構造の抽出 39
8.4.1 概念の分解統合が存在しない，同一概念をもつUML図式要素の抽出結果 41
8.4.2 ユースケースから始まり各フェーズで変換・詳細化されていく，主要中間成果物間の作成順序に関する情報が，どの程度正確にとりだせるか 43
8.4.3 分析設計のある段階で定義された，ある概念がその後，分解される場合 43
8.4.4 サンプルの有効性について 44
8.5 変更波及解析における有用性 45
8.5.1 変更個所特定への有用性 45
8.5.2 基本依存関係の充分性 46
8.5.3 正しい変更ルートの設定 48
8.6 本論文で提案した方式の有効性と課題 49

9 実装ツール 51
9.1 ツールの構造 51
9.1.1 中間成果物間の基本依存関係生成機構 52
9.1.2 中間成果物の読み込み 52
9.1.3 フレームワークの定義 54
9.1.4 プラグイン構造 55

9.2 機能 56
9.2.1 プロセス情報エディタ 56
9.2.2 基本依存関係の自動生成 58
9.2.3 変更波及解析表示 58
9.3 拡張例 59
9.3.1 Java 協調クラス群の抽出 59
9.3.2 Java クラス間の関係 61
9.3.3 協調クラス群抽出アルゴリズム 62
9.3.4 精度 63
9.3.5 プラグインの位置づけ 64

10 議論 66
10.1 基本依存関係の有効性 66
10.2 依存関係生成モデルへの拡張可能性 67

11 関連研究 68

12 おわりに 70
12.1 まとめ 70
12.2 今後の展望 70

謝辞 72

本研究に関する発表論文 76

A 評価に用いたデータ：エレベータ制御システム 78
A.1 プロセス情報 78
A.2 概念と UML 図式要素の対応表 78

B 評価に用いたデータ：ATM システム 83
B.1 プロセス情報 83
B.2 概念と UML 図式要素の対応表 83

C UML1.5 版における依存関係の定義 90
C.1 依存関係のセマンティクス 90

C.1.1 Dependency 91
C.1.2 Abstraction 91
C.1.3 Binding 91
C.1.4 Permission 92
C.1.5 Usage 92
C.2 依存関係の表記 93
C.2.1 パッケージ間に利用される破線矢印 93
C.2.2 インタフェースへの破線矢印 93
C.2.3 オブジェクト間の破線矢印 93
C.2.4 依存関係 93
C.2.5 InstanceOf 94
C.2.6 ユースケース関係 94
C.3 依存関係の表記とセマンティクスの対応関係 94

第 1章

はじめに

1.1 背景

ソフトウェアの開発工程は，要求分析，設計，実装，テストなど多くのフェーズから構成される．また，各フェーズにおいて作成される中間成果物は，要求定義書，設計図，ソースコードなど多岐にわたり，開発工程が進むにつれ，その量は膨大になる．そのため，開発者自身が中間成果物間の関連を充分に把握することが困難になる．このような状況下において，これらの中間成果物は，開発時あるいはソフトウェアテストや保守時に，方針変更やバグなどの発生にともない頻繁に変更される．このとき，ある中間成果物の変更によって失われた他の中間成果物との整合性を修復する変更作業が行われるが，以下のような問題が発生する．

- 中間成果物間の関連の認識不足によって，変更すべき中間成果物を把握しづらい．
- 開発者以外の中間成果物間の関連を充分に把握していない保守担当者によって行われる．

このような問題を解決するために，変更波及解析支援の研究が行われており，さまざまなアプローチが提案されている．以下に，本研究の対象とする UML 図の変更波及解析支援の代表的なアプローチを列挙する．

1. **開発者自身が UML 図式要素間に依存関係を設定する**　最も妥当な手法であるが，開発時の試行錯誤による図面の変更により，依存関係の付替が頻繁に発生する．そのため，依存関係の保守に多大なコストがかかる．

2. **波及解析ルールを定義・利用する**　依存関係の設定コストを軽減する手法であるが，UML を対象とした場合，すべての種類の図に対して波及解析ルールを定義する必要がある．

3. **情報検索技術を利用する**　名前などのキーワードを用いて抽出するため，依存関係の設定コストがなくなる．しかし，作成順序の情報を取りだせないため，抽出された図面群を吟味し，変更順序を検討する必要がある．

各アプローチが持つ利点は，変更波及解析に有用なものである．そのため，これらのアプローチをすべて利用した依存関係の自動生成機構を提案する．

1.2　目的

本研究は，UML 図とその構成要素 (以下，UML 図式要素と呼ぶ) を対象に，変更波及解析に有用な依存関係を定義し，それを自動生成する手法を提案する．UML の対象版を既存システムで多く利用されている 1.5 版とする．以下，UML 図と UML 図式要素をまとめて UML 記述と呼ぶ．

UML1.5 版において，依存関係は図 1.1 のように表現され,「ソースはターゲットに依存する」と読み,「ターゲットが変更されるとソースも変更される場合がある」という意味を持つ．

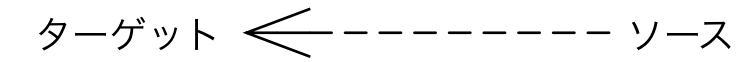

図 1.1: 依存関係の表記

2 章において，変更波及解析に利用でき，かつ，自動生成可能な基本依存関係を，ターゲットとソースの間の存在従属と共有情報に注目した分析を行うことにより定義する．

また，図 1.2 に示す手法による基本依存関係の自動生成法を提案する．図 1.2 において，UML 図面群とプロセス情報を入力し，依存関係生成モデルを利用して，UML 記述間の基本依存関係を出力する手法である．例えば，クラスとそのクラスから生成されるオブジェクトの振舞を示すステートチャートの間に，クラスが存在しなければステートチャートは存在しえないという関係を出力する．

本論文で提案する自動生成方式は，基本的にはUML記述間の名前の対応を利用する．すなわち，同じ概念には，UML図式要素の名前に類似した名前が用いられることを仮定する．しかし，フェーズ間にわたって名前の対応をとった場合，UML記述にはフェーズの情報がないため，どちらがソースであるかわからない．このため，プロセス情報も入力とする．ここでプロセス情報とは，開発方法論に依存する情報であり，開発方法論を構成するフェーズ，フェーズの実行順序，各フェーズに含まれるUML図面群を定義したものである．

自動生成の中核となる依存関係生成モデルは，照合規則，付加規則，選択規則で構成される．照合規則は，依存関係が付加可能であるUML記述の組み合わせを取り出す規則である．3章で定義する名前の対応付けルールを利用する．付加規則は，UML記述間に接続可能なすべての基本依存関係の型を定義した規則である．基本依存関係の両端にくるUML記述の型は開発方法論に依存するので，採用する開発方法論ごとに異なる付加規則を定義する必要がある．本論文では，Unified Processに基づく開発方法論に適用可能な付加規則を定義する．選択規則は，プロセス情報を用いて，適切な型を選択する規則である．

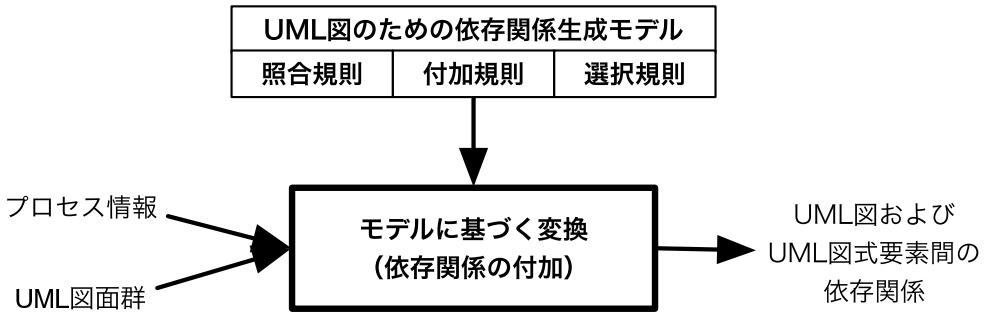

図 1.2: 依存関係の自動生成法の概要

これら3つの規則を利用して依存関係を自動生成する手順を以下に示し，図1.3に図示する．

1. **付加規則の定義**　基本依存関係の両端にくるUML記述の型を，採用した開発方法論に基づき決定し，付加規則を定義する．本論文では，Unified Processにも適用できる付加規則を定義する．

2. **可能なUML記述の組み合わせの検索**　照合規則に従って，基本依存関係が付加される可能性を持つUML記述のターゲットとソースの組み合わせを探す．図1.3では，

クラス ElevatorControl とそのインスタンスの組み合わせが検索されたことを示す．

3. **接続可能な依存関係の型の列挙**　付加規則を利用し，検索された UML 記述の各組み合わせに付加可能な基本依存関係の型をすべて列挙する．図 1.3 では，雲形シンボル内にある 2 種類の依存関係の型が列挙されたことを示す．

4. **適切な型の選択**　選択規則に従って，(2) で得られた型から適切な型を選び，(1) の組み合わせに付加する．図 1.3 では，破線矢印の依存関係の型が選ばれたことを示す．

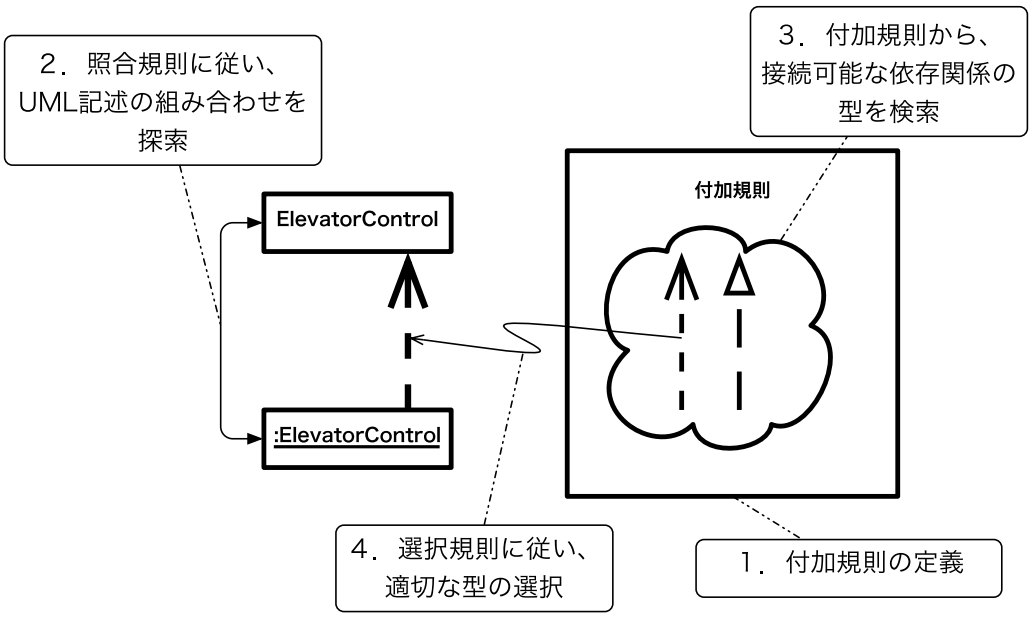

図 1.3: 基本依存関係の自動生成過程

1.3　本論文の構成

次章以降は，以下のように構成される．2 章では，基本依存関係を定義する．3 章において照合規則を，4 章において付加規則を，5 章において選択規則を定義する．6 章では，依存関係の自動生成法を述べ，7 章では，変更波及解析法を述べる．8 章では，実際的な例を用いて本手法の有効性を示す．9 章において実現したツールを紹介し、ツールの拡張機構について述べる。10 章では UML2.0 への対応可能性を議論する．11 章では関連研究を紹介し，本論文の成果を位置づける．12 章で本論文をまとめる．

第 2章

基本依存関係

本章では，変更波及解析に有用で，かつ，自動生成可能な基本依存関係を定義する．

UML1.5 版では，UML 図で用いる依存関係として 13 種類のステレオタイプが定義されている．これらのセマンティクスは，UML メタモデルで定義された 4 種類の依存関係とそのステレオタイプで表現される[1] ．これらの依存関係のセマンティクスは，開発者が遭遇する状況 (例えば詳細化や仕様の実現など)，UML 図式要素間の構造的関係，名前空間の公開や可視性のスコープなどに基づいて定義されている．しかし，依存関係の利用にあたっては設計者の意図が含まれるため，これらの依存関係を直接，自動生成することは困難である．

また，変更波及に関しては，多重度と OCL を利用して，さまざまな UML 図式要素間の数量的な存在条件を示しているのみである．

以下，まず 2.1，2.2 節における検討の結果得られた結論をまとめ，次に結論に至った分析過程を紹介する．

以下の 4 種類の基本依存関係は，UML1.5 版のメタモデル要素 “Dependency” を 2.1 節で分析し，また，設計者が暗黙的に認識する依存関係を 2.2 節で分析することにより得られた結果である．

1. **ある中間成果物が存在するために必要な中間成果物を示す依存関係**　このような依存関係は設計者の意図とは無関係に存在するため，これを自動生成することが可能である．例えば，このような依存関係はステートチャート図と，それに対応するクラ

[1] UML 図式要素の依存関係と、UML メタモデルの依存関係の対応については、付録の C 章において述べる．

スやパッケージ間に発生する．両端要素の名前を比較することにより，この自動生成が可能である．

2. **ターゲットの情報を示す依存関係**　ある中間成果物 (ソース) が既存の中間成果物 (ターゲット) を参照して作成されたとき，ターゲットとなる中間成果物中の関連する情報を，ターゲットの情報と呼ぶ．このとき，中間成果物間には次の 3 つの依存関係が発生する．

   (a) **ターゲットの情報がソースの情報の一部となる (すなわち，ターゲットとソースで情報が共有される) 場合**　共有される情報をもとに，中間成果物より依存関係を抽出することができる．ただし，その情報は中間成果物に記述されない場合があり，その場合は，この依存関係の自動生成は困難である．しかし，(1) が成り立つ多くの場合，この依存関係も同時に成り立つ．そのため，(1) の自動生成法を利用して，この依存関係の自動生成が可能である．

   (b) **ターゲットの全情報がソースの全情報となる場合**　共有される情報をもとに，中間成果物より依存関係を抽出することができる．共有される情報に含まれる中間成果物の名前を比較することにより，この場合は自動生成が可能である．

   (c) **ターゲットの情報をもとにソースの情報が作成される場合**　異なるフェーズにある中間成果物間のトレーサビリティに対応している．この依存関係は，プロセス情報を利用して解析できる．ただし，この依存関係の両端にくる中間成果物の名前は一致しないことがあり，類似した名前などにより対応をとる必要がある．

2.1　UML1.5 版のメタモデル要素 “Dependency”

本節では，UML1.5 版のメタモデル要素 “Dependency” の 4 種類のサブクラスを分析する．

2.1.1　Abstraction

Abstraction は「異なる抽象レベルや異なる視点から同じコンセプト (概念) を表現する，2 つの要素または要素の集合を示す依存関係」と定義されている．ここで，概念は，設

計者が UML 図式要素に与えた振舞や機能を示す[2]．UML 図では ≪derive≫，≪refine≫，≪trace≫，≪realize≫ を付加した依存関係として描かれる．この依存関係の特徴は「ソースは，ターゲットとは異なる立場から，概念を詳細化したものとなる」ことである．そのため，ターゲットの概念を変更した場合，ソースを見直す必要がある．これより，Abstraction における変更波及の要因は概念となる．これはターゲットの一部の情報であるが，ターゲットの概念を元にソースの概念は作成される．このことより，Abstraction は依存関係の分類 (2)-(c) に対応する．

Abstraction セマンティクスの記述例を図 2.1 に示す．図 2.1 は，分析モデルを構成するクラス Chessboard を元に，設計モデルを構成するクラス Chessboard が設計されたことを示す．このように，この依存関係を自動生成する場合，プロセス情報が必要となる．ここで，我々はターゲットとソースが同じ概念を持つ場合，ターゲットとソースの名前が類似する（その逆も成り立つ）と仮定する．以上より，同じ概念には類似する名前が与えられるという前提とプロセス情報を元に，同一概念を異なる抽象レベルや異なる視点から表現した UML 図式要素間には，依存関係 Abstraction の自動生成が可能である．

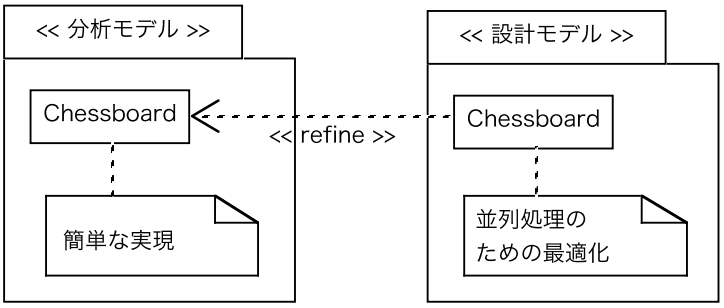

図 2.1: Abstraction セマンティクスの記述例

2.1.2 Binding

Binding は「テンプレート (ターゲット) と，テンプレートから作成された要素 (ソース) 間の依存関係であり，テンプレートパラメータに一致する属性リストを持つ」と定義されている．UML 図では ≪bind≫ を付加した依存関係として描かれる．この依存関係の特徴は「ソースは，ターゲットに属性リストの値を代入して生成された要素となる」ことであ

[2] UML 仕様書では，‘概念’ の定義が記されていないため，著者が定義した．

る．そのため，ターゲットのテンプレートパラメータを変更した場合，ソースを見直す必要がある．これより，Binding における変更波及の要因はテンプレートパラメータとなる．これはターゲットの一部の情報であり，ターゲットとソースに共有される．このことより．Binding は依存関係の分類 (2)-(a) に対応する．

Binding セマンティクスの記述例を図 2.2 に示す．図 2.2 は，テンプレート Set はテンプレートパラメータ T を持ち，その値として Employee を束縛したソース EmployeeList が作成されたことを示す．以上より，テンプレートパラメータがソースに記述された場合には，依存関係 Binding は自動生成できるが，非常に特殊な場合であるので通常は自動生成不可能であるとする．

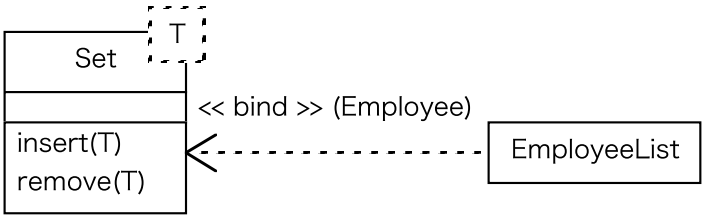

図 2.2: Binding セマンティクスの記述例

2.1.3 Permission

Permission は「要素 (ソース) に，他の名前空間の要素 (ターゲット) へのアクセスを許可することを示す依存関係」と定義されている．UML 図では ≪import≫，≪access≫，≪friend≫ を付加した依存関係として描かれる．この依存関係の特徴は「ソースは，ターゲットへアクセスできる要素となる」ことである．そのため，ターゲット中のアクセス可能な要素を変更した場合，ソースを見直す必要がある．これより，Permission における変更波及の要因はアクセス可能な要素となる．これはターゲットの一部の情報であり，ターゲットとソースに共有される．このことより，Permissin は依存関係の分類 (2)-(a) に対応する．

Permission セマンティクスの記述例を図 2.3 に示す．図 2.3 は，パッケージ Client は，パッケージ Policies の要素を取り込む許可を持つことを示す．以上より，アクセス可能な要素がソースに記述されないので，依存関係 Permission は自動生成できない．

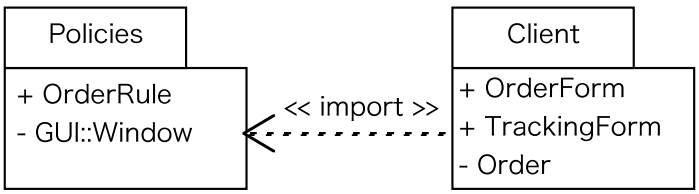

図 2.3: Permission セマンティクスの記述例

2.1.4 Usage

Usage は「ある要素 (ソース) が完全な実装や操作のために，他の要素 (ターゲット) を要求する依存関係」と定義されている．UML 図では ≪use≫，≪call≫，≪instanciate≫，≪create≫，≪send≫ を付加した依存関係として描かれる．この依存関係の特徴は「ソースは，ターゲットを利用して実装される要素となる」ことである．そのため，ターゲットを変更した場合，ソースを見直す必要がある．これより，Usage における変更波及の要因はターゲット自身となる．これはターゲットの一部の情報であり，ターゲットとソースに共有される．このことより，Usage は依存関係の分類 (2)-(a) に対応する．

Usage セマンティクスの記述例を図 2.4 に示す．図 2.4 は，クラス Client は，メソッド foo の引数にクラス Supplier を利用することを示す．このように，ソースの名前，属性やメソッドは，ターゲットの名前を必要とする．以上より，ターゲットの名前を, ソースまたは属性またはメソッドの名前に用いた場合，依存関係 Usage の自動生成が可能である．

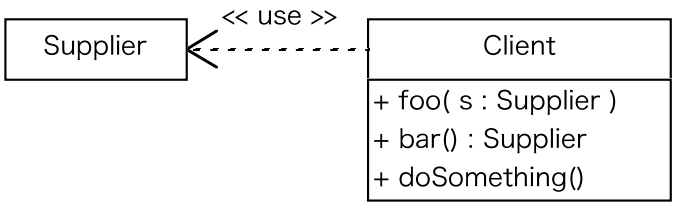

図 2.4: Usage セマンティクスの記述例

2.2 設計者が暗黙的に生成する依存関係

分析や設計において，様々なモデルを構築していく際に生成された UML 記述間の依存関係には，設計者が暗黙的に生成するものがある．そこで，前述の依存関係に加えて，設

計段階に自然に発生する依存関係を 2 つ追加する．

2.2.1 コピーされたもの

例えば，あるクラス図で描かれたクラスを，別のクラス図で利用することがある．それらのクラスには，同じ情報が描かれている必要があり，一方のクラス (ターゲット) が変更されたとき他方のクラス (ソース) も変更される．そのため，同じ情報を持つ要素を示す依存関係が，これらのクラス間に発生したとみなせる．これより，この変更波及の要因はターゲット自身である．ターゲットの情報とソースの情報は同一である．このことより，コピーされたものの間に発生する依存関係は，依存関係の分類 (2)-(b) に対応する．

この依存関係は，同じ情報を持つ中間成果物間に発生する．ただし，コピーの関係は，同じフェーズにあり，名前と型が一致するという条件で判定するため，この条件を満たす限り内容に若干の差異があってもよい．例えばクラスをコピーした場合，属性やメソッドに若干の違いがあっても，コピーと判定する．また，図面からどの UML 記述がオリジナルなものか判断できないため，この依存関係は双方向で設定される．

2.2.2 包含関係の記述

例えば，クラスと内部クラス間，図面とその構成要素間のように，UML 記述間に包含関係が発生する場合がある．このとき，設計者はその UML 記述間に依存関係があると認識する．包含されるもの (ソース) は包含するもの (ターゲット) の一部であるため，ソースはターゲットを必要とする．このことより，包含関係の記述を示す依存関係は依存関係の分類 (1) に対応し，この自動生成は，UML 記述の解析を元に可能である．

2.3 基本依存関係の定義

2.1, 2.2 節での分析結果を表 2.1 に示す．表 2.1 において，左から依存関係の種類，2 節の冒頭に示した依存関係の分類，自動生成の方法を示す．例えば，Abstraction は，依存関係の分類 (2)-(c) に対応し，開発方法論の情報を利用し，UML 記述の名前を比較することで自動生成可能である．

依存関係の各分類に対応させて，基本依存関係を定義する．以後，(1) に対応する基本依存関係を “生存従属”，(2)-(a) に対応する基本依存関係を “情報共有”，(2)-(b) に対応する

表 2.1: 依存関係の分析結果

	依存関係の分類	自動生成の方法
Abstraction	(2)-(c)	開発方法論の情報を利用し，UML記述の名前を比較する
Binding	(2)-(a)	なし
Permission	(2)-(a)	なし
Usage	(1) (2)-(a)	UML記述の名前を比較する
コピーされた	(2)-(b)	UML記述の名前を比較する
包含関係	(1)	UML記述の包含を解析する

基本依存関係を “コピー”，(2)-(c) に対応する基本依存関係を “同一概念” と呼ぶことにする．UML1.5 版では，ステレオタイプを利用して 13 種類の依存関係が定義されているが，我々は，2 節における議論を通じて，4 種類の基本依存関係として再定義した．

各基本依存関係の自動生成法を表 2.1 をもとにまとめる．

- **(1) 生存従属** “生存従属” は，Usage と包含関係による依存関係から定義された．Usage と包含関係を示す依存関係は UML 記述の名前の比較や，包含の解析によって自動生成可能である．よって，“生存従属” は名前が比較可能であるかまたは包含関係が解析可能である場合に自動生成可能である．

- **(2)-(a) 情報共有** “情報共有” は，Binding, Permission, Usage から抽出された．Binding と Permission は自動生成できないが，Usage は UML 記述の名前が比較可能である場合に自動生成可能である．よって，“情報共有” は, 共有される情報群の少なくとも一つの名前が比較可能である場合に自動生成可能である．

- **(2)-(b) コピー** “コピー” は，コピーされたものによる依存関係から抽出された．“コピー” は，UML 図式要素が同一フェーズ内に存在し，かつ，名前と型が一致するときに自動生成可能である．

- **(2)-(c) 同一概念** “同一概念” は，Abstraction から抽出された．これはプロセス情報を利用し，UML 記述の名前を比較することによって自動生成可能である．よって，“同一概念” は同じ概念には類似する名前が与えられるという前提とプロセス情報の存在を前提として自動生成可能である．

ただし，情報共有と生存従属が共に成り立つ場合，生存従属を設定せず，情報共有のみ設定する．クラスＡとその振舞を示すステートチャート図を用いて説明する．クラスＡがコピーされて複数の図に存在する場合，クラスＡの集合Ｓとステートチャート図の間に生存従属が成り立つ．これは集合Ｓが空集合のとき，すなわち，クラスＡがすべて削除されたとき，ステートチャート図が削除されることを意味する．一方，各クラスＡとステートチャート図の間に生存従属を設定したとする．これは，いずれかのクラスＡが削除されたとき，ステートチャート図が削除されることを意味する．以上より，後者のような中間成果物間の依存関係を用いて，前者の意味を表現できない．そのため，情報共有と生存従属が共に成り立つ場合，生存従属を設定せず，情報共有のみ設定する．

第 3章

照合規則

依存関係は，変更に関する本質的な情報を定義しているが，UML 記述に直接表現されない場合が多い．我々は，依存関係を設計者に設定させず，これらをすべて自動生成するという立場をとる．そのため，依存関係を付加する UML 記述の組み合わせを探す規則を定義する必要があり，これを照合規則として形式化する．その手がかりとして，2 章において，基本依存関係の自動生成に利用する情報として挙げた，UML 記述の名前と，UML 記述の包含関係を利用する．これらを用いて，ターゲット (T) とソース (S) の比較する情報を定義した，5 種類の照合条件を定義する．

- **Contained**　T の名前が，S の名前に含まれる．例えば、ターゲットの名前が「Elevator」、ソースの名前が「ElevatorControl」のとき、ソースの名前がターゲットの名前「Elevator」を含んでいるため、この条件を満たす。

- **Similar**　T の名前は，S の名前に似ている．例えば、ターゲットの名前が「FloorLampInterface」、ソースの名前が「FloorLampInterfaces」のとき、ソースの名前がターゲットの名前の複数形なので、この条件を満たす。

- **TypeSim**　T の型が，S の名前に似ている．例えば、ターゲットの名前が「: FloorLampInterfaces」、ソースの名前が「FloorLampInterface」のとき、ターゲットの型「FloorLampInterfaces」が、ソースの名前の複数形なので、この条件を満たす。

- **SimType**　T の名前が，S の型に似ている．例えば、ターゲットの名前が「FloorLampInterface」、ソースの名前が「 : FloorLampInterfaces」のとき、ソースの型「FloorLampInterfaces」が、ターゲットの名前の複数形なので、この条件を満たす。

- **Include**　T は，S を包含する．すなわち、UML 図とそれを構成する UML 図式要素、UML 図式要素とその内部要素の関係を示す。

ただし「似ている」とはターゲットの名前や型名と，同じもの，複数形，語頭や語尾に何らかの単語が付加されたものを指す．

表 3.1 に照合規則を示す[1] ．最左列から順に，依存関係のターゲットの UML 記述の型，ソースの UML 記述の型 (以下，それぞれターゲットの型，ソースの型と呼ぶ)，その組み合わせの照合条件を示す．例えば，ターゲットの型がユースケース図，ソースの型がアクター，照合条件が Include のとき，これは「ユースケース図はアクターを包含する」条件を示す．

[1] この規則は文献 9 および文献 11 の内容を吟味し作成した．ここで 4 番目の項目,‘ユースケース’ の名前が ‘ステートチャート図’ の名前に含まれるという関係に関しては，文献 11「ステートチャート図は, 状態および状態間の遷移という点から見て, ユースケースのインスタンスのライフサイクルを表します」という記述によった．

表 3.1: 照合規則

ターゲット	ソース	照合条件
ユースケース図	アクター	Include
ユースケース図	ユースケース	Include
ユースケース	クラス図	Contained
ユースケース	ステートチャート図	Contained
ユースケース	アクティビティ図	Contained
ユースケース	コラボレーション図	Contained
ユースケース	シーケンス図	Contained
ユースケース	ユースケース	Similar
アクター	アクター	Similar
アクター	クラス	Similar
アクター	オブジェクト	TypeSim
クラス図	クラス	Include
クラス図	パッケージ	Include
パッケージ	クラス	Include
パッケージ	パッケージ	Similar
クラス	パッケージ	Similar
クラス	オブジェクト	SimType, Contained
クラス	ステートチャート図	Contained
クラス	アクティビティ図	Contained
クラス	クラス	Similar, Include
オブジェクト図	オブジェクト	Include
オブジェクト	クラス	TypeSim
オブジェクト	ステートチャート図	TypeCont
オブジェクト	アクティビティ図	TypeCont
オブジェクト	オブジェクト	Similar, Include
コンポーネント図	コンポーネント	Include
コンポーネント	コンポーネント	Similar
配置図	ノード	Include
ノード	ノード	Similar
ステートチャート図	状態	Include
状態	状態	Similar, Include
アクティビティ図	アクション状態	Include
アクション状態	アクション状態	Similar, Include
コラボレーション図	オブジェクト	Include
シーケンス図	オブジェクト	Include

第 4章

付加規則

2 章で定義した 4 種類の基本依存関係は，その両端に設定可能な UML 記述の型に関して制限がある．この制限は開発方法論に依存する．4.1 節で開発方法論 Unified Process を利用した設計過程と UML 仕様を分析して，各種基本依存関係の両端にくる UML 記述の種類を分類した結果を表 4.1 に示す．表 4.1 において，基本依存関係の両端に設定可能な UML 記述の型を生成モデル要素と呼ぶことにする．このとき，生成モデル要素間に 4 種類の基本依存関係の一部を設定することができる．生成モデル要素間にどのような基本依存関係が付加できるのかを定義した規則を付加規則と呼ぶ．4.2 節で述べる理由により，Unified Process においては，図 4.1 に示すような付加規則を定義する事が可能である．以下，4.1 節，4.2 節において，表 4.1，図 4.1 を定義した過程を示す．

4.1　生成モデル要素の定義

Unified Process を利用した設計過程においてフェーズ間に発生する依存関係の分析例を図 4.2 に示す．図 4.2 において，長方形はフェーズを示し，その内部に作成された図の種類を示す．フェーズ間にある破線の矢印はフェーズ間の依存関係を示し，理由をコメントシンボルで示す．図 4.2 の最上において，アクターとユースケースを洗い出すために，要求を参照してユースケース図を作成するフェーズがあることを示す．ただし，フェーズ間の依存関係の種類とフェーズの数は，開発方法論に依存する．

以下，図 4.2 を用いて，基本依存関係が設定される UML 記述の組に成り立つ，UML 記述の特性とフェーズに関する関係を検討する．その関係を満たす UML 記述の型の組を図 4.2 からとりだし，その型を表 4.1 に示す生成モデル要素として定義する．

表 4.1: 生成モデル要素

生成モデル要素	UML図または図面要素
Classifier要素	アクター、ユースケース、クラス、パッケージ、 ノード、コンポーネント、オブジェクト(オブジェクト図)
関係要素	関連、依存、集約、汎化、リンク
状態要素	状態、アクション状態
遷移要素	遷移、イベント、アクション
インスタンス要素	オブジェクト(コラボレーション図、シーケンス図)
メッセージ要素	メッセージ
関係図	ユースケース図、クラス図、オブジェクト図、 コンポーネント図、配置図
振舞図	ステートチャート図、アクティビティ図
相互作用図	シーケンス図、コラボレーション図

4.1.1 情報共有

基本依存関係「情報共有」は，ターゲットの情報がソースの情報の一部となることを示す．この特徴は，ターゲットとソースは何らかの‘情報’を共有することである．UML 記述では，‘情報’は名前や属性，操作名などに対応する．以上より，図 4.2 において,「情報共有」が設定される UML 記述の組に成り立つ関係は「両 UML 記述は，同じフェーズにあり，かつ，異なる側面（型，実体，振舞）を表現すること」を示す関係である．

図 4.2 に基づき，この条件を満たす UML 記述の型の組を示し，型を生成モデル要素として定義する．

4.1.1.1 Classifier 要素とその振舞

- **ターゲットとソース**　例えば，クラスとステートチャート図のように，ターゲットが‘役割’でソースが‘振舞’の組に発生する．‘役割’には，アクター，ユースケース，クラス，パッケージ，ノード，コンポーネント，オブジェクト図のオブジェクトがある．‘振舞’の表現には，ステートチャート図，アクティビティ図がある．

- **生成モデル要素**　‘役割’に対応する生成モデル要素「Classifier 要素」を定義する．‘振舞’に対応する生成モデル要素「振舞図」を定義する．

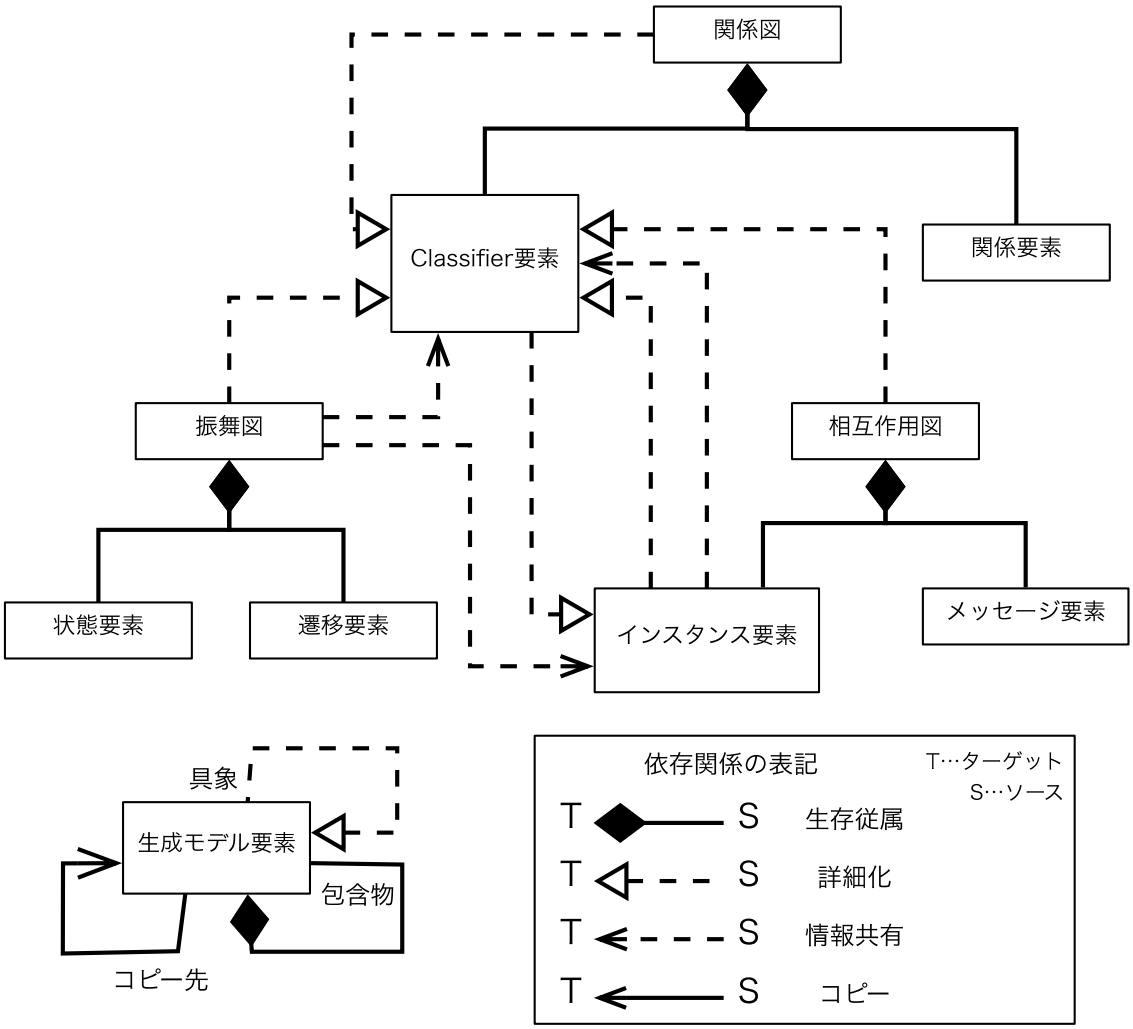

図 4.1: 付加規則

4.1.1.2 インスタンスとその振舞

- **ターゲットとソース**　例えば，オブジェクトとその振舞を示すUML図のように，ターゲットが‘実体’でソースが‘その振舞’の組に発生する．

- **生成モデル要素**　‘実体’に対応する生成モデル要素「インスタンス要素」を定義する．‘その振舞’に対応する生成モデル要素は「振舞図」として定義済みである．

4.1.1.3 Classifier 要素とインスタンス

- **ターゲットとソース**　例えば，クラスとオブジェクトのように，ターゲットが‘型’で

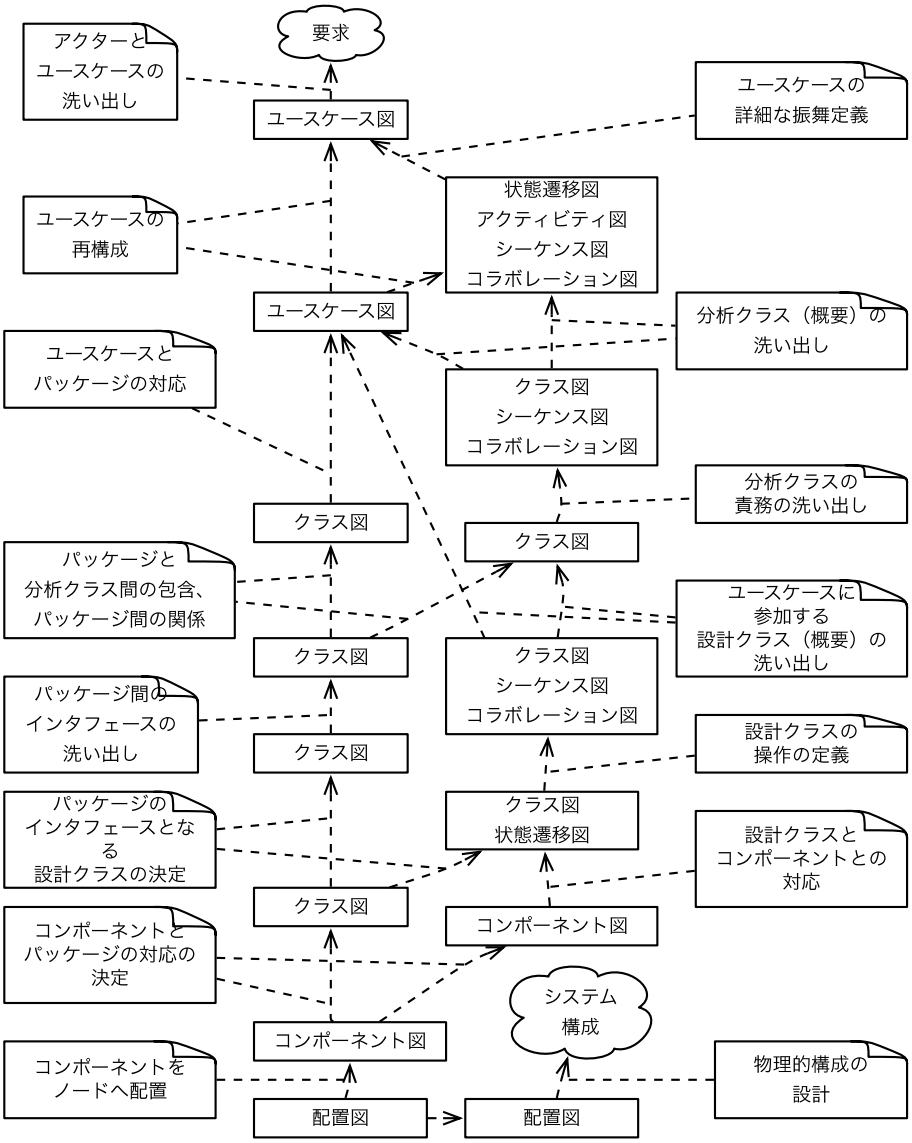

図 4.2: Unified Process におけるフェーズ間に発生する依存関係の分析例

ソースが‘実体’の組に発生する．

- **生成モデル要素**　両型に対応する生成モデル要素は，4.1.1.1 節，4.1.1.2 節において定義済みである．

4.1.2　コピー

基本依存関係「コピー」は，ターゲットの全情報がソースの全情報となる場合に発生する．この特徴は，ターゲットとソースは同一の情報を持つことである．以上より，図 4.2 に

おいて,「コピー」が設定される UML 記述の組に成り立つ関係は「両 UML 記述は，同じフェーズにあり，かつ，異なる図面にあり，かつ，同じ UML 記述の型であり，かつ，名前が同じであること」を示す関係である．

図 4.2 に基づき，この条件を満たす UML 記述の型の組を示し，型を生成モデル要素として定義する．

4.1.2.1 同一 UML 図式要素

- **ターゲットとソース** 例えば，設計フェーズが設定される 2 枚のクラス図にあるクラス ‘ElevatorControl’ 間のように，ターゲットが ‘情報’ で，ソースが同じフェーズの同じ ‘情報’ を示す UML 図式要素の組に発生する．

- **生成モデル要素** これはすべての UML 図式要素にあてはまる．そのため，‘情報’ に対応する生成モデル要素として，すべての UML 記述に対応する生成モデル要素，すなわち，すべての生成モデル要素の親クラス「生成モデル要素」を定義する．

4.1.3 同一概念

基本依存関係「同一概念」は，ターゲットの情報をもとにソースの情報が作成される場合に発生する．この特徴は，ソースはターゲットを元に作成され，かつ，ターゲットとソースは同じ目的を異なる情報で表現することである．以上より，図 4.2 において,「同一概念」が設定される UML 記述の組に成り立つ関係は「両 UML 記述は，隣接するフェーズにあること」を示す関係である．

図 4.2 に基づき，この条件を満たす UML 記述の型の組を示し，型を生成モデル要素として定義する．

4.1.3.1 Classifier 要素とその振舞

- **ターゲットとソース** 例えば，クラスとステートチャート図のように，ターゲットが ‘役割’ でソースが ‘振舞’ の組に発生する．‘役割’ には，アクター，ユースケース，クラス，パッケージ，ノード，コンポーネント，オブジェクト図のオブジェクトがある．‘振舞’ の表現には，ステートチャート図，アクティビティ図がある．

- **生成モデル要素**　‘役割’ に対応する生成モデル要素は「Classifier 要素」として，‘振舞’ に対応する生成モデル要素「振舞図」を定義済みである．

4.1.3.2　協調の抽象と具象

- **ターゲットとソース**　例えば，ユースケースとコラボレーション図[1] の組のように，ターゲットが ‘協調の抽象’ で，ソースが ‘協調の具象’ の組に発生する．

- **生成モデル要素**　‘協調の抽象’，‘協調の具象’ に対応する生成モデル要素「相互作用図」を定義する．

4.1.3.3　非実装図の要素と実装図の要素

ただし．実装図はコンポーネント図と配置図を示し，非実装図は全種類の図から実装図を除いた 7 種類の図を示す．

- **ターゲットとソース**　例えば，クラスとコンポーネントの組など，ターゲットが ‘非実装図の要素’ で，ソースが ‘実装図の要素’ の組に発生する．

- **生成モデル要素**　‘非実装図の要素’ と ‘実装図の要素’ に対応する生成モデル要素は，「Classifier 要素」として定義済みである．

4.1.3.4　非実装図の要素の抽象と具象

- **ターゲットとソース**　例えば，クラス名だけ定義されたクラス図と操作のシグネチャや属性の型が定義されたクラス図の組のように，ターゲットが ‘抽象的な非実装図の要素’ で，．ソースが ‘具象的な非実装図の要素’ の組に発生する．

- **生成モデル要素**　図面の抽象と具象間の依存関係は，構成要素の抽象と具象間の依存関係に置換えて表現でき，この置き換えはすべての図で適用できる．そのため，‘抽象的な非実装図の要素’ と ‘具象的な非実装図の要素’ に対応する生成モデルとして「生成モデル要素」を用いる．

[1] UML2.0 では，コミュニケーション図と改められた．

4.1.4 生存従属

基本依存関係「生存従属」は，ある中間成果物が存在するために必要な中間成果物を示す場合に発生する．この特徴は，ソースはターゲットがないと存在しないことである．

2.3 節で述べたように,「生存従属」は「情報共有」と共に設定される場合がある．その場合，両端要素の型は「情報共有」に設定した型と同じになり，それは 4.1.1 節で定義された．一方,「生存従属」のみ設定される場合，2.3 節で述べた通り，UML 記述の包含を示す場合である．以上より，図 4.2 において,「同一概念」が設定される UML 記述の組に成り立つ関係は「両 UML 記述は，同じ図面にあること」を示す関係である．

上記の作業に基づき，この条件を満たす UML 記述の型の組を示し，型を生成モデル要素として定義する．

4.1.4.1 UML 図と UML 図式要素間

- **ターゲットとソース**　例えば，クラス図とそれを構成するクラスの組のように，ターゲットが‘包含するもの’で，ソースが‘包含されるもの’の組に発生する．

- **生成モデル要素**　‘包含するもの’に対応する生成モデル要素は「振舞図」「相互作用図」の他に，複数の Classifier 要素を関連，依存，集約，汎化，リンクなどで結合した図の生成モデル要素「関係図」を定義する．Classifier 要素を結合するパスの生成モデル要素を「関係要素」と定義する．振舞図は，状態またはアクション状態を遷移で結合したものである．状態とアクション状態の生成モデル要素を「状態要素」，その間の遷移の生成モデル要素を「遷移要素」と定義する．相互作用図は，インスタンス要素間のメッセージの流れを表現する．メッセージの生成モデル要素を「メッセージ要素」と定義する．

4.1.4.2 UML 図式要素間

- **ターゲットとソース**　例えば，クラスと内部クラスの組のように，ターゲットが‘包含するもの’で，ソースが‘包含されるもの’の組に発生する．

- **生成モデル要素**　‘包含する’/‘される’UML 図式要素に対応する生成モデル要素として「生成モデル要素」を利用する．

4.2 付加規則の定義

4.1.1 節から 4.1.4 節における分析によって，基本依存関係の種類ごとに，その両端に対応する UML 記述の型の組を示した．以下に，それらの組をそれぞれターゲット．ソースの順に再掲する．

- **情報共有**
  - Classifier 要素と振舞図の組
  - Classifier 要素とインスタンス要素の組
  - インスタンス要素と振舞図の組
- **コピー**
  - 生成モデル要素と生成モデル要素の組
- **同一概念**
  - Classifier 要素と関係図の組
  - Classifier 要素と相互作用図の組
  - Classifier 要素と振舞図の組
  - 生成モデル要素と生成モデル要素の組
  - Classifier 要素とインスタンス要素の組
  - インスタンス要素と Classifier 要素の組
- **生存従属**
  - 関係図と Classifier 要素の組
  - 関係図と関係要素の組
  - 振舞図と状態要素の組
  - 振舞図と遷移要素の組
  - 相互作用図とインスタンス要素の組
  - 相互作用図とメッセージ要素の組

– 生成モデル要素と生成モデル要素の組

以上の生成モデル要素の組に基本依存関係を設定した規則を，図 4.1 に図示する．図 4.1 において，長方形は生成モデル要素を示し，4 種類の矢印は各種基本依存関係を示す．

これらの基本依存関係が発生する UML 記述の組は，図 4.2 に示す Unified Process を用いて解析した．そのため，Unified Process が用いられた場合，付加規則に従って UML 図面間に基本依存関係を付加することができる．

第 5章

選択規則

付加規則において，いくつかの生成モデル要素の組に数種類の基本依存関係が設定された．ここで，基本依存関係を UML 記述間に付加するとき，設定されたすべての種類を付加するかどうか検討する．4.1.1 節から 4.1.4 節において示した，基本依存関係が設定される UML 記述の組に成り立つ関係を再掲する．

- **情報共有**　同じフェーズにあり，かつ，異なる側面を表現する（すなわち，同じ図面で型と実体の双方が使われることがない．例えば，クラス図とオブジェクト図は別の図面として存在する）．
- **コピー**　同じフェーズにあり，かつ，異なる図にあり，かつ，同じ UML 記述の型であり，かつ，同じ名前である
- **同一概念**　隣接するフェーズにある
- **生存従属**　同じ図面にある．図面はいくつかのファイルに分割されていてもよい．

このように，これらの関係にはフェーズ，図面，UML 記述の型，名前を用いて排他的な基準が存在する．そのため，基本依存関係を付加する場合，設定された数種類の中から適切なものだけ付加することになる．これらの基準を用いて，各 UML 記述の組み合わせに適切な種類を選択する規則として選択規則を定義する．

5.1 選択規則の定義

まず，基本依存関係が設定される UML 記述の組に成り立つ関係を，4 つの基準 (フェーズ，図面，UML 記述の型，名前) を用いて再定義する．基準に関する制約がないときには，特に記載しない．

- 情報共有
  - **フェーズ**　同じである．
  - **図面**　異なる．
  - **UML 記述の型**　異なる．
- コピー
  - **フェーズ**　同じである．
  - **図面**　異なる．
  - **UML 記述の型**　同じである．
  - **名前**　同じである．
- 同一概念
  - **フェーズ**　隣接する．
- 生存従属
  - **フェーズ**　同じ図面であるため，フェーズも同じである．
  - **図面**　同じである

上記の分析結果をまとめた結果を選択規則と定義し，表 5.1 に示す．表 5.1 において，表の上下左右部に 4 基準を示し，中央にその基準を満たす種類を示す．例えば，フェーズが同じであり，かつ，図面が異なり，かつ，UML 記述の型が異なる場合，情報共有が選択される．ただし，種類が記されていないセルに対応する 4 基準から成る条件は，基本依存関係のどの種類の条件も満たさないことを意味する．すなわち，このセルの条件に当てはまる UML 記述の組には，基本依存関係を付加しない．

表 5.1: 選択規則

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="4">フェーズ</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">同じ</td><td>隣接</td><td>離れている</td></tr>
<tr><td rowspan="2">UML記述の型</td><td>同じ</td><td rowspan="3">生存従属</td><td>コピー</td><td rowspan="3">同一概念</td><td rowspan="3">-</td><td>同じ</td><td rowspan="4">名前</td></tr>
<tr><td rowspan="2">異なる</td><td>-</td><td>異なる</td></tr>
<tr><td>情報共有</td><td>同じ</td></tr>
<tr><td></td><td>異なる</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">同じ</td><td colspan="2">異なる</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="4">図面</td></tr>
</table>

5.2 プロセス情報

上記の基準で用いた「フェーズ」の情報は，UML 図から取り出すことができない．そこで，特定の開発プロセスの各フェーズで作成された図の情報を設計者に記述させ，それを利用する．この情報をプロセス情報と呼ぶ．

プロセス情報は，図 5.1 のように構成される．図 5.1 において，パッケージ名にフェーズの名前を，パッケージ内のクラス名に作成される図の名前を，パッケージ間の依存関係にフェーズの実行順序を示す．

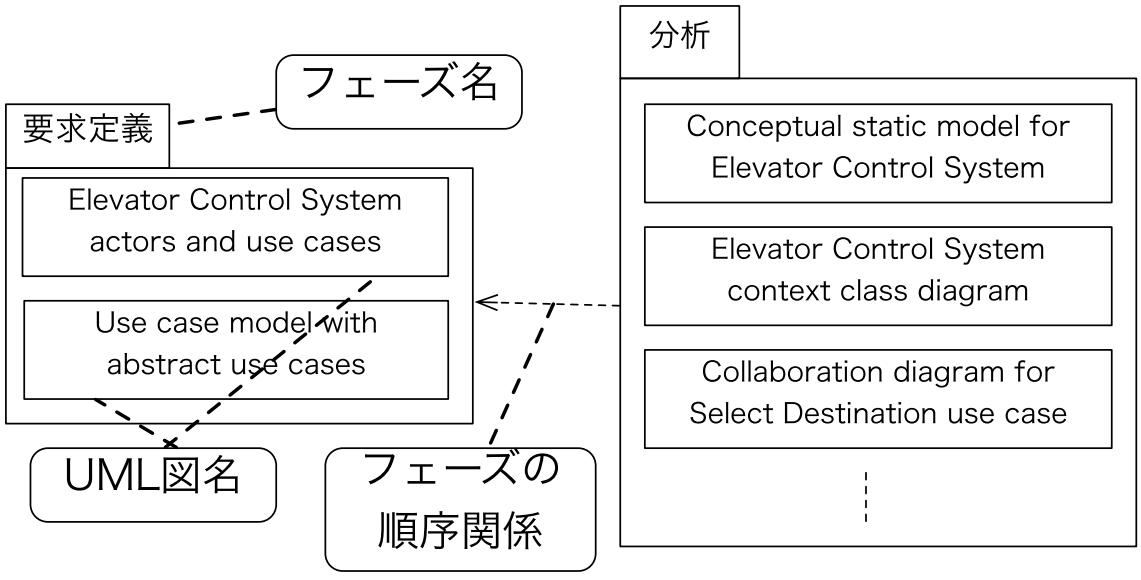

図 5.1: プロセス情報

第 6章

依存関係の自動生成

本章では，簡単な例を用いて依存関係を自動生成する過程を述べる．例として，クラス “ElevatorControl” とオブジェクト “:ElevatorControl” の間に基本依存関係を自動生成する過程を以下に述べ，図 6.1 に示す．ただし，両 UML 記述とも，同じフェーズにあると仮定する．

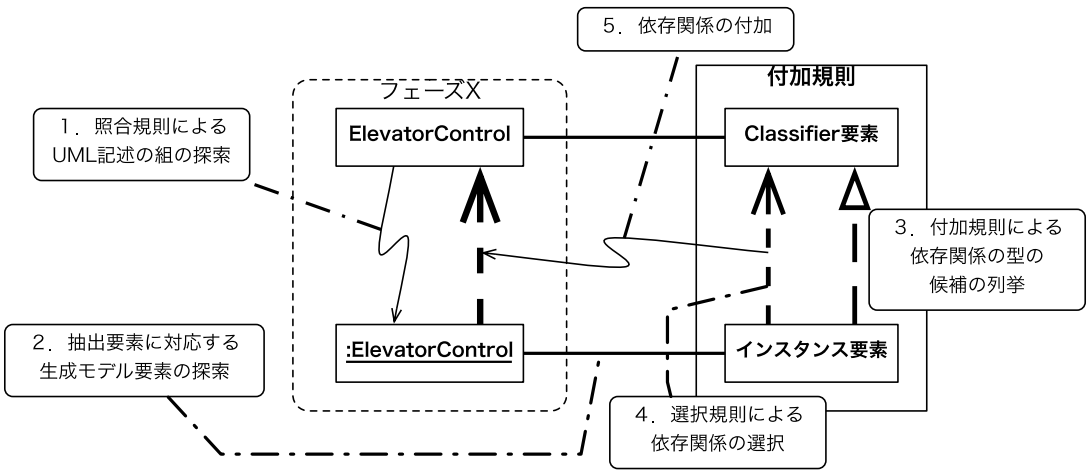

図 6.1: 依存関係の自動生成法

1. **UML 記述の組み合わせの抽出**　照合規則より，ターゲットをクラス，ソースをオブジェクトとする規則「クラスの名前は，オブジェクトの名前に含まれる」を適用する．この例ではクラス名がオブジェクトの名前に含まれるため，この規則を満たす．

2. **生成モデル要素の検索**　表 4.1 より，クラスとオブジェクトの生成モデル要素は，それぞれ Classifier 要素とインスタンス要素である．

3. **基本依存関係の型の列挙**　図 4.1 の付加規則より，Classifier 要素をターゲット，インスタンス要素をソースとする基本依存関係の情報共有と同一概念を，両要素をつなぐ基本依存関係の候補として列挙する．

4. **型の選択**　2 つの図面が同一フェーズで作成されたことを示すプロセス情報があるため，選択規則より「情報共有」を選ぶ．

5. **基本依存関係の付加**　基本依存関係「情報共有」を，両 UML 記述間に付加する．

第 7章

変更波及解析の方法

設定された依存関係を追跡することにより変更波及を解析を行う技術は，文献 2, 8, 22 などですでに提案されており，本論文でも同じ手法を採用する．クラス “ElevatorControl” の変更波及解析例を用いて，その解析方法を以下に述べ，図 7.1 に示す．

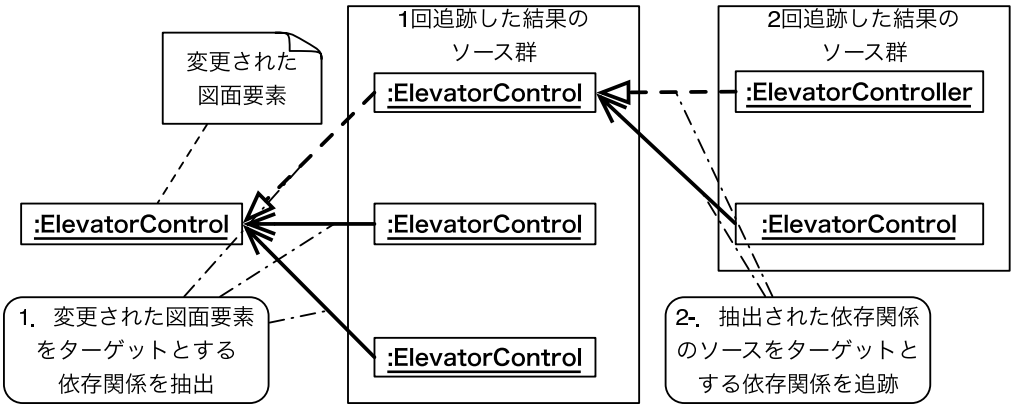

図 7.1: 波及解析方法

1. **変更された要素から波及する UML 記述群の取り出し**　このクラスをターゲットとする依存関係を探し，そのソースの UML 記述を取り出す．

2. **波及した UML 記述群から，さらに波及する新たな UML 記述群の取り出し**　前工程で取り出された UML 記述をターゲットとする依存関係を探し，そのソースの UML 記述を取り出す．

3. **(2) の反復**　UML 記述は一度しか追跡されないとして，UML 記述が取り出されなくなるまで繰り返す．

本手法を利用して解析可能な変更波及は，論理的な波及である．変更波及は論理的な波及と，システムの性能に関する波及の 2 種類にわけられる [23]．論理的な波及とは，他の中間成果物との一貫性を論理的に保証するための変更波及であり，システムの性能に関する波及とは，システム性能の向上を目的として構造や振舞を再構成するための変更波及である．

第 8章

評価

本節では，提案手法の有効性を評価する．題材として，Unified Process の一種である開発方法論 COMET[9] により作成されたエレベータ制御システムと ATM システムをとりあげる．エレベータ制御システムは，エレベータを 1 つのコントローラで制御する集中管理型のシステムであり，ATM システムは，ATM と銀行サーバとの連携を含む分散管理型のシステムである．これらの題材に本論文で提案した手法を適用して，自動生成された基本依存関係の精度，および変更波及解析における有用性を評価する．

8.1 評価対象の特徴

評価対象の選択にあたっては，ドメイン，アーキテクチャ，フェーズ構成，フェーズに出現する UML 図の頻度などの観点から以下の二つの例題をとりあげて評価する．以下にエレベータ制御システムと ATM システムの特徴をまとめる．

エレベータ制御システム

1. **ドメイン**　センサー・アクチュエータベースのリアルタイム制御システム
2. **アーキテクチャ**　集中制御型
3. **フェーズ構成の特徴**　ユースケースによる機能要求定義，問題領域オブジェクトの発見と動的モデリング，サブシステム設計，タスク設計
4. **各フェーズで利用している図面の種類と数**　ユースケースによる機能要求定義 (ユースケース図 2 枚)，問題領域オブジェクトの発見と動的モデリング（クラス図 2 枚，ス

テートチャート図5枚，コラボレーション図5枚)，サブシステム設計（クラス図1枚，コラボレーション図3枚)，タスク設計（クラス図1枚，コラボレーション図）

ATM システム

1. **ドメイン**　トランザクション管理

2. **アーキテクチャ**　クライアントサーバ

3. **フェーズ構成の特徴**　ユースケースモデルによる機能要求定義，エンティティオブジェクトに関するドメイン分析（種々のトランザクション，口座，カード情報など)，アーキテクチャスタイルの決定（クライアントサーバ)，クライアントサブシステムおよびサーバサブシステムに対するユースケースの割り当て，サブシステムごとの問題領域オブジェクトの発見，サブシステム内部構造の詳細化，タスク設計

4. **各フェーズで利用している図面の種類と数**　ユースケースモデルによる機能要求定義（ユースケース図1枚)，エンティティオブジェクトに関するドメイン分析（種々のトランザクション，口座，カード情報など）（クラス図6枚)，アーキテクチャスタイルの決定（クライアントサーバ)，クライアントサブシステムおよびサーバサブシステムに対するユースケースの割り当て（ユースケース図1枚，コラボレーション図3枚)，サブシステムごとの問題領域オブジェクトの発見（クラス図1枚，ステートチャート図6枚，コラボレーション図6枚，シーケンス図2枚)，サブシステム内部構造の詳細化（コラボレーション図2枚)，タスク設計（コラボレーション図2枚）

8.2　評価のための基礎データの作成と評価方式

8.1節で述べたエレベータ制御システムの分析・設計例 (27枚の UML 図) と，ATM システムの分析・設計例 (30枚の UML 図) を対象にして，それらの UML 記述 (UML 図および UML 図式要素) 間に文献9の著者 (設計者) が認識したであろう設計情報間のつながりを再現した．まず，それぞれのシステムの UML 図式要素を列挙し，それらの間の基本依存関係を我々が設定した．

1. エレベータ制御システムの場合，UML 図式要素が256個，設定された基本依存関係は1189個であった．ATM システムの場合，UML 図式要素が259個，設定された基

本依存関係は 1059 個であった．これを基礎データ 1 とする．エレベータ制御システムの結果を付録 A.2 の表 A.1-A.3 に，ATM システムの結果を付録 B.2 の表 B.1-B.5 に示す．表 A.1-A.3 の一部を表 8.1 に示す．

表 8.1: UML 図での概念の記述 (一部)

概念	側面	フェーズ「要求定義」での名前 [記述された図面No]	フェーズ「分析」での名前	フェーズ「サブシステム設計」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ArrivalSensor	型	ArrivalSensor(A)[1,2]	ArrivalSensor(C)[3,4]		
	実体		:ArrivalSensor(A)[7]	:ArrivalSensor(O)[15, 16]	:ArrivalSensor(O)[22, 23, 24, 29]
ArrivalSensorInterface とタスク	型			ArrivalSensorInterface(C)[18]	
	実体		:ArrivalSensorInterface(O)[7, 14]	:ArrivalSensorInterface(O)[16]	:ArrivalSensorsInterface(O)[23, 24]

＊(A)…アクター、(C)…クラス、(O)…オブジェクト

表 8.1 の読み方は以下の通りである．例えば，概念 “ArrivalSensor” は，フェーズ「要求定義」において，アクター “ArrivalSensor” なる型として，図面 1, 2 に記述されたことを示す．

表 8.1 をもとに，基本依存関係をどのように設定したかを説明する．

- 異なるフェーズのシンボル間には ‘同一概念’ の基本依存関係を設定する
- 異なる UML 記述の型 (型と実体) のシンボル間には ‘情報共有’ の基本依存関係を設定する
- 同一フェーズのシンボル間には ‘コピー’ の基本依存関係を設定する
- 図面とその構成要素間，および，包含関係となる構成要素間には ‘生存従属’ の基本依存関係を設定する

表 A.1-A.3 をもとに，表の最左端の「概念」に対応する．適切な UML 図式要素が適切なフェーズに存在することが確認することにより，表 A.1-A.3 で設計者によって構築された分析設計結果が再現できたと考えた．ただし，本研究では，クラスなどのシンボルに依存関係を生成するので，シンボル間のパス（UML 用語であり，例えばクラスに対する関連のように，シンボル間の結合を表わす記号）の再現を省略した．

2. さらに，最後のフェーズの設計結果（この場合はタスク設計結果）を出発点として，フェーズを逆にたどり，ある中間成果物（UML 図式要素）を作成するために，作成済みの中間成果物のどれを参照したかという参照関係を基礎データ 1 とは独立に分析した．これを基礎データ 2 とする．基礎データ 1 で分析した基本依存関係は，すべてこの参照関係に含まれたので，基礎データ 1 の妥当性も確認できたと思う．基礎データ 2 で新たに追加された参照関係は，エレベータ制御システムの場合，問題領域オブ

ジェクトとユースケースの対応に関して 53 個，タスクとタスクを構成するオブジェクト群の対応に関して 10 個であり，ATM システムの場合，問題領域オブジェクトとユースケースの対応に関して 37 個，タスクとタスクを構成するオブジェクト群の対応に関して 6 個であった．前者は概念の分解，後者は概念の統合に関するものであった．本論文で提案する方式では，概念の分解の問題は「包含関係」で取り扱う方針を採用しているが，その適用の前提に適合しないケースである．結果として，基礎データ 2 においては，エレベータ制御システムの場合，UML 図式要素が 256 個，設定された依存関係は 1252（1189 + 63）個，ATM システムの場合，UML 図式要素が 259 個，設定された依存関係は 1102（1059 + 43）個であった．基礎データ 1 と基礎データ 2 は，本論文で提案した方式の有効性を検討するための土台として利用する．

自動生成された基本依存関係の精度および，変更波及解析への有用性は，再現率と適合率により評価した．ここで，$\#X$ を事象 X の個数として，再現率 (Recall) と適合率 (Precision) の式を以下に示す．

$$Recall(\%) = \frac{\#(A \cap B)}{\#A} \times 100$$
$$Precision(\%) = \frac{\#(A \cap B)}{\#B} \times 100$$

ただし，$\#A$ を設計者が認識したと思われる基本依存関係数，$\#B$ を自動生成された基本依存関係数とする．

評価は以下の 3 段階にわけて行う（図 8.1 参照）．

1. 基礎データ 1 および 2 が現実世界の認識を近似していると仮定し，自動生成された基本依存関係が，基礎データ 1 や 2 とどの程度一致しているのかを再現率と適合率により評価する (8.3 節)

2. 本論文で提案した方式は，同じ概念には同じまたは類似の名前が与えられる（その逆も成立）と仮定している．この仮定のもとに，変更対象となる UML 図式要素の名前に類似する名前を持つすべての UML 記述をとりだし，それらの間に基本依存関係を設定することにより，変更波及解析に関与するであろう部分構造を取り出すアプローチである．概念の分解に関しては，包含関係で取り扱う．そこで，名前と包含関係をを手掛かりに同じ概念または関連する概念をどの程度抽出できるかを再現率と適合率により評価する (8.4 節)

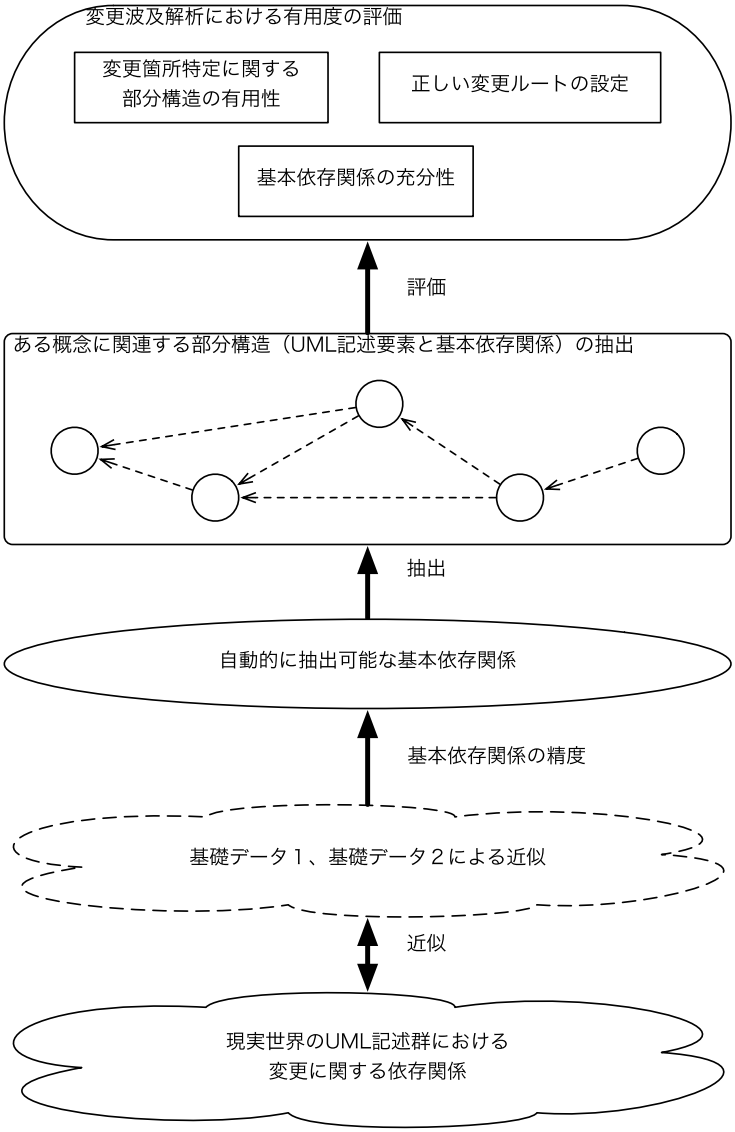

図 8.1: 評価の内容

3. 抽出された構造が変更波及解析にどの程度有用であるかを，変更個所特定に関する有用性，基本依存関係の充分性，正しい変更ルートの設定の観点から評価する (8.5 節)

8.3 自動生成された基本依存関係の精度

まず，図 8.2 に，概念 “ElevatorStatus&Plan” に関して自動生成された基本依存関係の一部を示す．図 8.2 において，

- 右下の角が曲がっている長方形は UML 図を表わし，その内側の上段に図の名前と番号を示す．

- 角が丸い長方形で囲まれた図面群は，同じフェーズで作られた図面群を示す．
- フェーズ間にある破線の矢印は依存関係を示し，上段の分析フェーズから下段のサブシステム設計フェーズの順に作業が行われたことを示す．
- またサブシステム設計フェーズの UML 図 (18) はクラス図で，その中にクラスと内部クラスがある．
- 残りの UML 図はコラボレーション図である．

以下のような基本依存関係が生成されていることが確認できる．

- **生存従属**　各図とそれに属する図面間，クラスと内部クラス間
- **コピー**　上位フェーズのオブジェクト間
- **同一概念**　上位フェーズのオブジェクトと，下位フェーズのオブジェクトおよびクラス間
- **情報共有**　下位フェーズの “ElevatorStatus&Plan” クラスとそのオブジェクト間

本手法を用いて自動生成された基本依存関係の精度を調べるため，生成された箇所と型を評価する．自動生成されたひとつの基本依存関係はその両端に，ある特定の UML 記述を持つ．両端の UML 記述と生成された基本依存関係の型を基礎データ 1 と比較し，すべて完全に一致した場合，正しく自動生成されたとする．

各題材において，自動生成された基本依存関係の調査結果を表 8.2 に示す．表 8.2 において，正解数は設計者が認識したと思われる基本依存関係数を，ノイズ数は自動生成されたが設計者の認識外の基本依存関係数を，検索漏れ数は自動生成されなかったが設計者が認識した基本依存関係数を示す．ノイズ数，検索漏れ数に含まれる基本依存関係は，すべて基本依存関係「同一概念」であった．

基礎データ 2 の場合は正解数をそれぞれ，1252 と 1102 にすればよい，結果を表 8.3 に示す．

ノイズ数，検索漏れ数に含まれる基本依存関係は，すべて，同一概念を示す UML 図式要素間の基本依存関係であった．追加された参照関係はすべて検索漏れにカウントされている．

自動生成された基本依存関係は，表 8.2 と表 8.3 に示す精度を考慮にいれた上で，利用できると判断した．

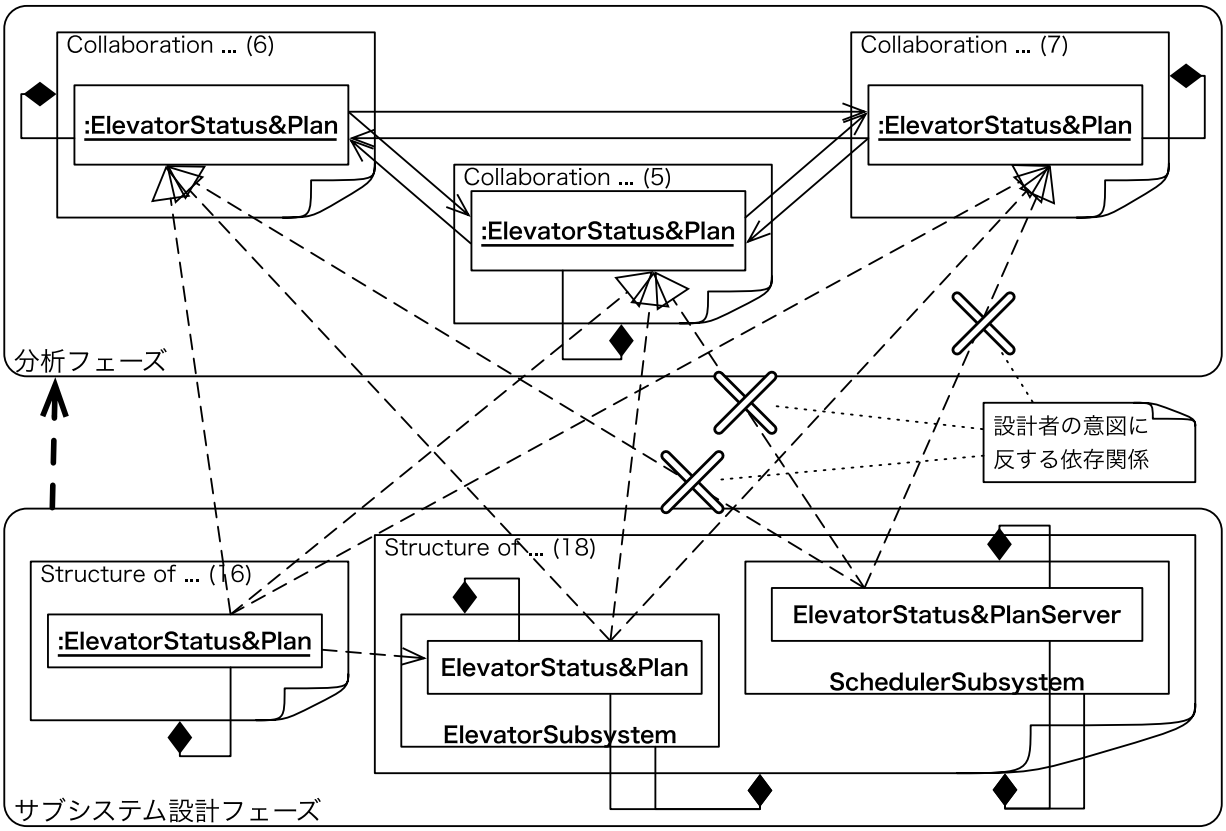

図 8.2: 生成された依存関係の一部

8.4 ある概念に関連する部分構造の抽出

本論文で提案した方式は，同じ概念には同じまたは類似の名前が与えられる（その逆も成立）として，類似する名前を持つすべての UML 図式要素を照合規則によりとりだし，それらの間に自動的に設定される基本依存関係も含めて，変更波及解析の元データとして利用するというアプローチである．

自動設定される基本依存関係の精度については 8.3 節ですでに述べた．本節では，概念が同じものを，どの程度の精度で，照合規則が抽出できるかを評価する．また，包含関係が概念の分割・統合をどの程度取り扱えるか評価する．

ところで，抽出の精度を議論する際，評価するデータの選択は重要である．ここでは，同一の方法論で作成されたエレベータ制御システムと ATM システムを対象としており，8.1 節で説明した違いはあるにしても，必ずしも一般的とはいえない．そこで，評価の目標としては，本論文で提案する方式の一般的な有用性を主張するのではなく，その利点と欠点を明らかにするという立場をとる．

上記をふまえ，以下の三つの分類からなるテストケースを設定した．

表 8.2: 自動生成された基本依存関係 (基礎データ 1)

	エレベータ制御システム	ATMシステム	
正解数	1189	1059	#A
自動生成数	1333	1215	#B
検索漏れ数	20	42	#(A-B)
ノイズ数	164	198	#(B-A)
再現率	98.3%	96.0%	
適合率	87.7%	83.7%	

表 8.3: 自動生成された基本依存関係 (基礎データ 2)

	エレベータ制御システム	ATMシステム	
正解数	1252	1102	#A
自動生成数	1333	1215	#B
検索漏れ数	83	85	#(A-B)
ノイズ数	164	198	#(B-A)
再現率	93.3%	92.3%	
適合率	87.7%	83.7%	

1. 概念の分解統合が存在しない，フェーズにわたる，同一概念をもつ UML 図式要素をもれなく抽出できるか．表 8.4 と表 8.5 の分類（1）に対応する．

2. 各フェーズで作成される主要中間成果物間の関係の抽出．ユースケースから始まり各フェーズで変換・詳細化されていく，主要中間成果物間の作成順序に関する情報が，どの程度正確にとりだせるか．表 8.4 と表 8.5 の分類（2）に対応する．

3. 分析設計のある段階で定義されたある概念がその後詳細化，分解される場合，それを追跡することが可能か．表 8.4 と表 8.5 の分類（3）に対応する．

表 8.4 と表 8.5 に，基礎データ 1 および基礎データ 2 を基準にして計算した評価値（再現率・適合率）を示す．なお，基礎データ 2 を基準にした結果は，表中に括弧書きで示す．

表 8.4: 基礎データ 1 および 2 を基準にした抽出精度（エレベータ制御システム）

分類	サンプル番号	UML図式要素の名前 (UMLの型/役割)	正解	自動生成	共通	検索漏れ	ノイズ	再現率	適合率
(1)	1	ArrivalSensor (アクター/外部オブジェクト)	10 [12]	14	10	0 [2]	4	100% [83.3%]	71.4%
	2	ElevatorButtonInterface (オブジェクト/インタフェース)	6 [6]	6	4	2 [2]	2	66.7% [66.7%]	66.7%
	3	ElevatorControl (クラス/コントロール)	48 [48]	71	48	0 [0]	23	100% [100%]	67.6%
	4	ElevatorStatus&Plan (オブジェクト/エンティティ)	9 [9]	16	9	0 [0]	7	100% [100%]	56.2%
	5	ElevatorController (オブジェクト/タスク)	8 [45]	9	8	0 [37]	1	100% [17.8%]	88.9%
(2)	6	Select Destination (ユースケース)	99 [117]	131	99	0 [18]	32	100% [84.6%]	75.6%
	7	Request Elevator (ユースケース)	100 [138]	127	98	2 [40]	29	98.0% [71.0%]	77.2%
	8	Dispatch Elevator (ユースケース)	138 [144]	177	138	0 [6]	39	100% [95.8%]	78.0%
	9	Stop Elevator at Floor (ユースケース)	154 [160]	185	150	4 [10]	35	97.4% [93.8%]	81.1%
(3)	10	FloorSubsystem (クラス/サブシステム)	23 [23]	23	23	0 [0]	0	100% [100%]	100%
	11	Scheduler (クラス/サブシステム)	26 [26]	26	26	0 [0]	0	100% [100%]	100%
	12	ElevatorSubsystem (クラス/サブシステム)	46 [46]	76	46	0 [0]	30	100% [100%]	60.5%

8.4.1 概念の分解統合が存在しない，同一概念をもつ UML 図式要素の抽出結果

表 8.4 と表 8.5 の分類（1）は，同一概念を持つ UML 図式要素が照合規則によりどの程度の精度で抽出できるかを示したものである．

表 8.4 と表 8.5 のサンプル 1 から 5 は，システムの外部に存在するもの，インタフェースオブジェクト，コントロールオブジェクト，エンティティオブジェクト，タスクオブジェクトの UML 図式要素から 1 つずつ選ばれた．表 8.4 と表 8.5 において，

1. 再現率は表 8.4 のサンプル 2 を除き，基礎データ 1 においてはいずれも高い．

2. 表 8.4 のサンプル 2 の再現率が低い理由は，動的モデリングにおける名前と，タスク

表 8.5: 基礎データ 1 および 2 を基準にした抽出精度（ATM システム）

分類	サンプル番号	UML図式要素の名前 (UMLの型/役割)	正解	自動生成	共通	検索漏れ	ノイズ	再現率	適合率
(1)	1	CardReader (クラス／外部オブジェクト)	10 [11]	20	10	0 [1]	10	100% [90.9%]	50.0%
	2	Account (クラス／エンティティ)	3 [5]	7	3	0 [2]	4	100% [60.0%]	42.9%
	3	: CustomerInterface (オブジェクト/インタフェース)	10 [10]	10	10	0 [0]	0	100% [100%]	100%
	4	BankTransactionServer (オブジェクト/コントロール)	13 [13]	14	11	2 [2]	3	84.6% [84.6%]	78.6%
	5	ATMController (オブジェクト/タスク)	20 [41]	18	17	3 [24]	1	85.0% [41.5%]	94.4%
(2)	6	Withdraw Funds (ユースケース)	145 [17]	145	145	0 [17]	0	100% [89.5%]	100%
	7	Client Withdraw Funds (ユースケース)	126 [134]	126	126	0 [8]	0	100% [94.0%]	100%
	8	Server Withdraw Funds (ユースケース)	95 [95]	95	95	0 [0]	0	100% [100%]	100%
	9	Validate PIN (ユースケース)	120 [140]	120	120	0 [20]	0	100% [85.7%]	100%
	10	Client Validate PIN (ユースケース)	108 [115]	108	108	0 [7]	0	100% [93.9%]	100%
	11	Server Validate PIN (ユースケース)	96 [96]	96	96	0 [0]	0	100% [100%]	100%
(3)	12	ATMClientSubsystem (パッケージ/サブシステム)	98 [98]	90	90	8 [0]	0	91.8% [91.8%]	100%
	13	BankServerSubsystem (パッケージ/サブシステム)	26 [26]	0	0	26 [26]	0	0% [0%]	0%

設計における名前が異なっていたためである．

3. 適合率は全般的に高いとは言えない．文献 12 には，情報検索技術に基づく再現率と適合率がどの程度になるかが報告されており，本実験でも，傾向としては同じような結果が得られている．

4. 基礎データ 2 にした場合，表 8.4 のサンプル 5 と表 8.5 のサンプル 2 と 5 の再現率が落ちた．双方とも基礎データ 2 で新たに認識された参照関係に関与しており，複数のオブジェクトが統合されてタスクが定義されるという例である．統合に関する取扱いは現在検討中であり，今後の課題である．

以上の結果より，分類（1）においては本方式の欠点に基づく，いくつかの例外を除いて，高い再現率と妥当な適合率が得られたものと判断する．

8.4.2 ユースケースから始まり各フェーズで変換・詳細化されていく，主要中間成果物間の作成順序に関する情報が，どの程度正確にとりだせるか

ユースケース定義から始まり，あとに続くフェーズで変換・詳細化されて定義される種々のUML図式要素（コラボレーション図に含まれる要素，クラス図に含まれる要素，サブシステムに含まれる要素，タスク設計図に含まれる要素など）が表8.4と表8.5の分類（2）に示す精度で抽出されており，再現率・適合率ともよい結果を示している．

8.4.3 分析設計のある段階で定義された，ある概念がその後，分解される場合

表8.4と表8.5の分類（3）は，分解された概念に対応するUML図式要素をどの程度の精度で追跡できるかを示したものである．

本論文で提案する方式では，分割前の概念（図8.3の名前Aに対応）と分割後の概念群（図8.3の名前a', b'に対応）の基本依存関係は，分割後の概念群をまとめる名前A'と分割後の概念群（図8.3の名前a', b'に対応）に与えられた名前との間に包含関係を設定し，名前AとA'の間に照合規則で類似性が認識されたときに設定される．

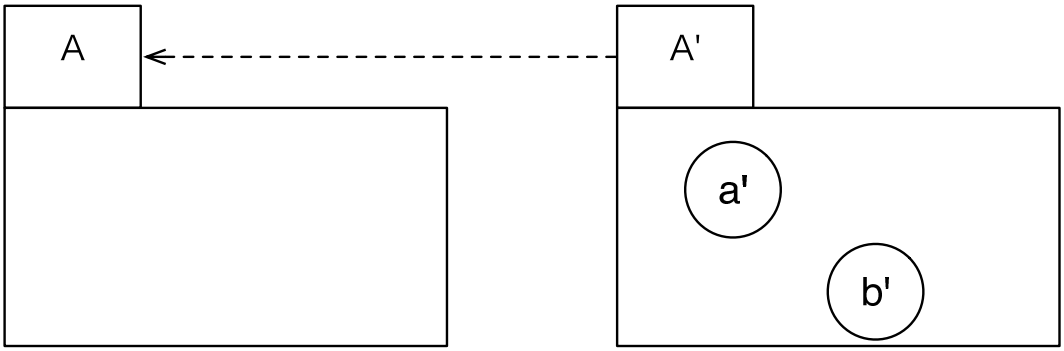

図 8.3: 分割される概念

われわれの方式で追跡可能なのは，A と A’ が照合規則によりマッチする場合である．または，A が a を含み，a と a’ が照合規則でマッチした場合も追跡できる（図 8.4）．

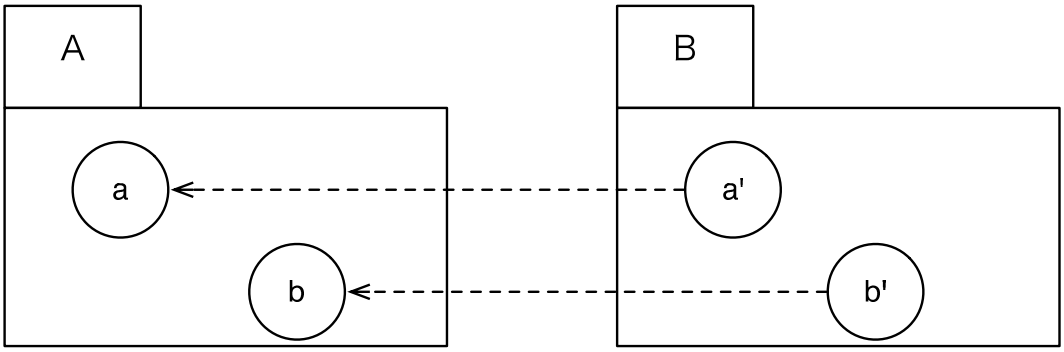

図 8.4: 分割される概念を追跡できる場合

表 8.4 のサンプル 10，11，12 と表 8.5 のサンプル 12 は，上記の条件が成立した場合に対応している．表 8.5 のサンプル 13 は，A と A’ の間に照合規則で類似性が認識されなかった場合である．

ところで，表 8.4 と表 8.5 において分割される場合の適合率が 100%であるという意味について説明する．図 8.3 に示すように，名前 A を持つある概念が存在するとして，次のフェーズで部分概念 a’, b’ に分解され，部分概念の集合には A’ なる名前が与えられたとする．

このとき，適合率をカウントする方式に二つの立場が考えられる．包含されるものがすべてとりだされたので，再現率 100%，適合率 100%とする立場と，実際の変更作業において，確認すべきものはその一部分（例えば a’）であり，a’ が含まれているため再現率は 100%，余分なもの (b’) を含むため適合率は，例えば 50%とする立場である．表 8.4 と表 8.5 における値は前者の立場をとっている．その根拠は，ほとんどの場合，部分概念の集合は一枚の図面に表現されるので，その中の関連要素を特定する作業は人手に任せるという立場である．後者の立場に立った時の評価値を表 8.6，表 8.7 の括弧内に示す．

どちらの立場を採用しても，再現率はほとんど変化しないが，後者の場合，当然，適合率が急減する．ところで，エレベータ制御システムのサンプル 10 で再現率が落ちているのは，変更に関連する要素間に基本依存関係が生成されなかったためである．

8.4.4 サンプルの有効性について

表 8.4，表 8.5 に示した分類（1）のサンプルは，特定のものが取り上げられている．そのサンプルをどのように取り上げたかを説明する．同じ型のサンプルについては，すべての

表 8.6: エレベータ制御システムにおける変更波及解析結果

分類	サンプル番号	UML図式要素の名前 (UMLの型/役割)	正解	自動生成	共通	検索漏れ	ノイズ	再現率	適合率
(2)	6	Select Destination (ユースケース)	99 (8)	131	99 (8)	0 (0)	32 (123)	100% (100%)	75.6% (6.1%)
	7	Request Elevator (ユースケース)	100 (8)	127	98 (8)	2 (0)	29 (119)	98.0% (100%)	77.2% (6.3%)
	8	Dispatch Elevator (ユースケース)	138 (8)	177	138 (8)	0 (0)	39 (169)	100% (100%)	78.0% (4.5%)
	9	Stop Elevator at Floor (ユースケース)	154 (8)	185	150 (8)	4 (0)	35 (178)	97.4% (100%)	81.1% (4.3%)
(3)	10	FloorSubsystem (クラス/サブシステム)	23 (3)	23	23 (1)	0 (2)	0 (22)	100% (33.3%)	100% (4.3%)
	11	Scheduler (クラス/サブシステム)	26 (3)	26	26 (3)	0 (0)	0 (23)	100% (100%)	100% (8.3%)
	12	ElevatorSubsystem (クラス/サブシステム)	46 (4)	76	46 (4)	0 (0)	30 (72)	100% (100%)	60.5% (5.3%)

サンプルについて再現率と適合率を計算し，その平均値，分散，最大値，最小値を計算した．その中で平均値に近いものを選択した．表 8.8，表 8.9 に，選択の基礎になった基本統計量を示す．なお，ユースケースとサブシステムについては，表 8.4，表 8.5 の分類（2），(3）の基本統計量を計算したものである．

8.5 変更波及解析における有用性

ある概念に関連する部分構造の変更波及における有用性を，変更個所特定への有用性，基本依存関係の充分性，正しい変更ルート設定への寄与の観点から評価する．

8.5.1 変更個所特定への有用性

表 8.4，表 8.5 における，分類（1）の評価結果より，対象とする UML 図面群より，ある概念と同じ概念を持つすべての UML 図式要素をよい精度で特定できることがわかった．このことは変更波及解析においては，それらの UML 図式要素を含む UML 図面群を特定することに寄与する．

表 8.7: ATM システムにおける変更波及解析結果

分類	サンプル番号	変更元のUML図式要素の名前(型)	正解	自動生成	共通	検索漏れ	ノイズ	再現率	適合率
(2)	6	Withdraw Funds (ユースケース)	145 (7)	145	145 (7)	0 (0)	0 (138)	100% (100%)	100% (4.8%)
	7	Client Withdraw Funds (ユースケース)	126 (7)	126	126 (7)	0 (0)	0 (119)	100% (100%)	100% (5.6%)
	8	Server Withdraw Funds (ユースケース)	95 (3)	95	95 (3)	0 (0)	0 (92)	100% (100%)	100% (3.2%)
	9	Validate PIN (ユースケース)	120 (7)	120	120 (7)	0 (0)	0 (113)	100% (100%)	100% (5.8%)
	10	Client Validate PIN (ユースケース)	108 (7)	108	108 (7)	0 (0)	0 (101)	100% (100%)	100% (6.5%)
	11	Server Validate PIN (ユースケース)	96 (3)	96	96 (3)	0 (0)	0 (93)	100% (100%)	100% (3.1%)
(3)	12	ATMClientSubsystem (パッケージ/サブシステム)	98 (6)	90	90 (6)	8 (0)	0 (84)	91.8% (100%)	100% (6.7%)
	13	BankServerSubsystem (パッケージ/サブシステム)	26 (2)	0	0 (0)	26 (2)	0 (0)	0% (0%)	0% (0%)

また，分類（2）の評価結果より，開発方法論の流れにそって作成された UML 図面群のうち，変更に関与するサブセットもよい精度で特定できるといえよう．

ただし，いずれの場合にも，概念の分解・統合が存在する場合には，再現率が落ち，必要な調査対象を見落とす恐れがある．

変更波及解析者に，我々のモデルが提供する情報は，何を調査しなければいけないかに関する情報であり，どのような順序で何を変更すればよいかに関しては，人手にゆだねられる．

8.5.2 基本依存関係の充分性

文献 26 に，本論文で提案した方法と方向性が同じ研究成果が独立に報告されている．共通する点は，フィーチャモデルを除き，すべての UML モデルを対象にしていることである．すなわち，文献 26 に提案されているトレースモデルとルールに基づくトレーサビリティの実現は，トレースモデルが我々の付加規則に対応し，ルールが照合規則と付加規則

表 8.8: エレベータ制御システムにおけるサンプルの基本統計量

エレベータ制御システム	概念数	再現率（単位：%）				適合率（単位：%）			
		最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
システム外部オブジェクト	11	100	100	100	0	1.0	100	56.4	29.6
インタフェースオブジェクト	8	66.7	100	79.7	16.8	50	71.4	62.8	8.4
コントロールオブジェクト	5	100	100	100	0	62.5	100	76.9	16.2
エンティティオブジェクト	2	100	100	100	0	56.3	68.4	62.3	8.6
タスクオブジェクト	9	28.6	100	62.4	35.7	56.3	100	88.1	17.7
ユースケース	4	97.4	100	98.9	1.3	75.6	81.1	77.9	2.3
サブシステム	3	100	100	100	0	60.5	100	86.8	22.8

にマージしたものに対応している．トレースモデルで取り扱っているモデル要素は，我々の生成モデル要素に，同じ粒度で対応している．文献 26 におけるモデル要素間のトレーサビリティ関係は，我々の基本依存関係に対応している．表 8.10 に対応を示す．表 8.10 において，e1，e2 はモデル要素を表わす．

我々の基本依存関係は解析可能な言語的手がかりをもとに分類されているのに対して，文献 26 では，より意味を精密にしたトレーサビリティ関係を定義しており，変更活動に関する示唆を与えうるという点において，文献 26 の方式のほうが有用であろう．しかし，文献 26 のルールは我々の照合規則と付加規則を一体化した形で定義されており，組織が採用するネーミングルールと開発方法論は独立したものであるので，われわれの方式のように別個に定義するほうが，対応性や保守性にすぐれているものと思われる．

また，文献 30 より，UML モデル要素間の対応について我々の付加規則によく似た分析結果が独立に報告されている．違いは記述レベルの粒度である．文献 30 では，モデル間の整合性検証を実現するため，モデル間の対応をメソッド名やイベント名などの細粒度で対応づけている．我々のモデルの目的は，UML 図式要素の特定であるため，文献 30 より粒度は粗い．

表 8.9: ATM システムにおけるサンプルの基本統計量

ATM システム	概念数	再現率（単位：%）				適合率（単位：%）			
		最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
システム外部オブジェクト	11	60	100	96.4	12.1	1.2	100	42.3	39.7
インタフェースオブジェクト	5	100	100	100	0	100	100	100	0
コントロールオブジェクト	5	84.6	100	87.5	6.1	78.6	100	82.6	8.5
エンティティオブジェクト	13	100	100	100	0	42.9	100	87.1	8.6
タスクオブジェクト	4	76.9	85.7	82.5	3.9	50.0	94.4	73.6	19.4
ユースケース	6	100	100	100	0	100	100	100	0
サブシステム	2	0	91.8	45.9	64.9	0	100	100	70.7

8.5.3 正しい変更ルートの設定

変更波及解析の担当者に，現在の我々のモデルが提供できる情報は，どの図面や UML モデル要素を調査しなければいけないかに関する情報であり，どのような順序で何を変更すればよいかに関しては，現在のところ提供できないことはすでに述べた．

表 8.4 における分類（2）の 4 つのユースケースの解析において，図 8.5 に示す解析結果が得られた．

異なる概念だが名前の類似によって生成された基本依存関係を，自動的に除去する方法を考察する．

図 8.5 において，3 種類の図はそれぞれ異なるフェーズで作成されたユースケース図，コラボレーション図，クラス図であり，各図は基本依存関係に結合された UML 図式要素を持っている．ここで，コラボレーション図中の ElevatorStatus&Plan とクラス図中の ElevatorStatus&PlanServer の間には，照合規則により誤った対応が認識され，結果として誤った基本依存関係が設定されている．この誤って認識された基本依存関係は，現在は人手によって削除することになる．

誤って認識された基本依存関係を削除するルールを定義することができれば，変更順序を示唆するワークフローの自動生成に発展させる可能性を持ち，今後の課題である．

表 8.10: トレーサビリティ関係と基本依存関係の比較

Satisfiability	e1 が e2 の期待や要求を満たす	同一概念
Encompass	e1 が e2 の内容を含んでいる	生存従属，情報共有
Dependency	e1 が e2 の存在に依存している	生存従属，同一概念，情報共有
Overlap	e1 と e2 がシステムまたは ドメインの共通側面を参照する	同一概念，情報共有
Evolution	e1 が e2 によって置き換えられる	該当なし
Implement	e1 が e2 を実現する	同一概念
Refinment	e1 が e2 を詳細化する	生存従属，同一概念，情報共有
Cotainment	e1 が e2 の要素を利用する	生存従属，情報共有
Similar	プロダクトライン固有	該当なし
Different	プロダクトライン固有	該当なし

8.6 本論文で提案した方式の有効性と課題

8 節での評価結果をまとめる．

限定された評価実験での範囲内ではあるが，以下のような本方式の利点が認識された．

- 自動生成された基本依存関係は，基礎データ 2 を定義したときに分析した実際の参照関係を十分に反映するものであり，8.3 節に示した精度を考慮にいれた上で，有用であると判断できる．
- 本論文で提案した方式は，同じ概念には同じまたは類似の名前が与えられる（その逆も成立）という前提のもとで，同一概念をもつ UML 図式要素の抽出，ユースケースから始まり各フェーズで変換・詳細化されていく，主要中間成果物間の作成順序に関する情報の抽出に有用であると判断できる．

一方，本方式の持つ現在の限界も明らかになった．

- 分析設計の過程で認識定義された概念がそれ以降の図面で分解される場合，名前だけによる追跡は限界をもつ．ある概念が分解された場合，全体名の間に対応がある場合にのみ追跡可能である．
- また，概念の統合の取扱いは今後の課題として残された．

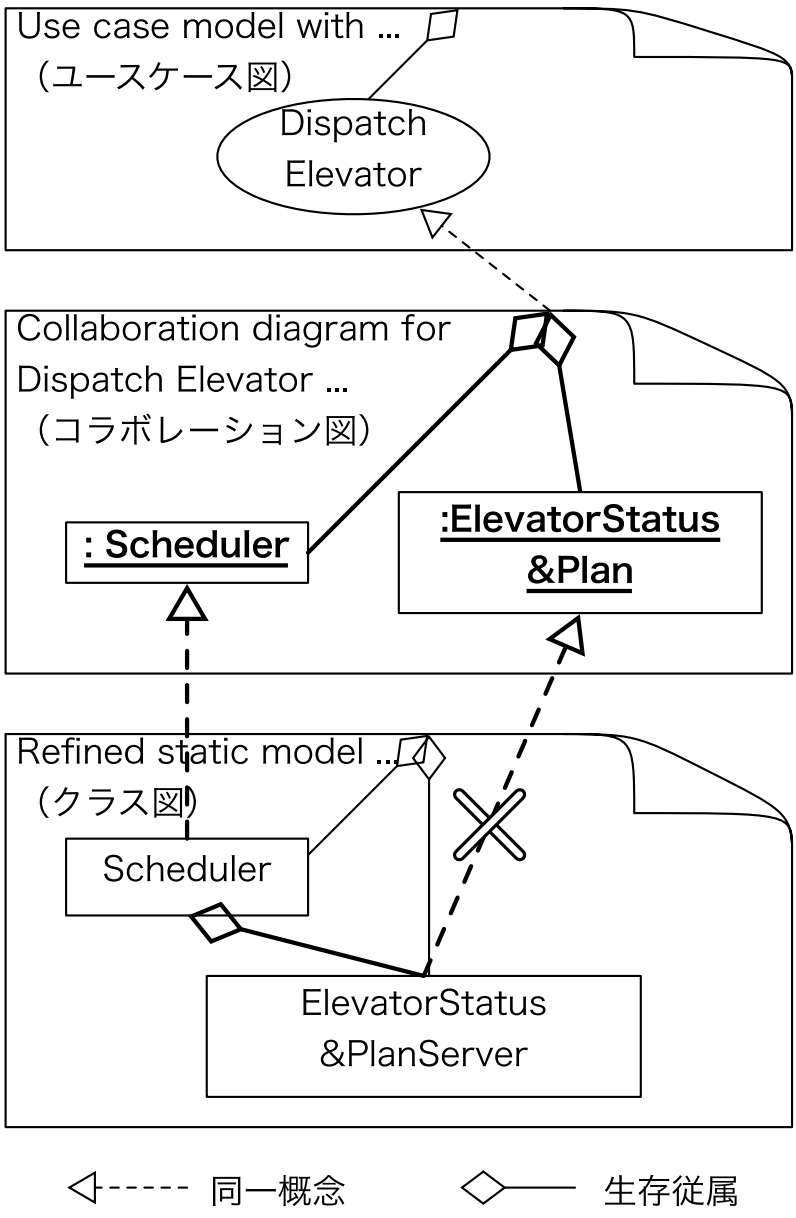

図 8.5: エレベータ制御システムにおける変更波及解析結果

第 9章

実装ツール

本章は，提案手法を実装した変更波及解析ツールとそのフレームワークについて述べる．依存関係の追跡による変更波及解析は，UML 図に限らず，さまざまな種類の中間成果物に適用できると考える．そのため，さまざまな種類の基本依存関係の生成システムを追加可能な変更波及解析ツールのフレームワークを定義し，Eclipse[24] プラグイン機構を用いて実装した[1]．読み込み可能な UML モデリングツールのファイルは，PatternWeaver[20] で作られたファイルである．以降，ツールの機能，ツールの構造を順に述べ，本ツールに UML 図と Java プログラムの対応関係を生成する機能を追加するプラグインを用いた，ツールの拡張例を述べる．

9.1　ツールの構造

基本依存関係を用いた変更波及解析は，図 9.1 に示すように，以下の 2 ステップで行われる．

- **ステップ 1**　中間成果物間の基本依存関係の生成
- **ステップ 2**　基本依存関係の追跡による変更波及解析

ステップ 1 では，中間成果物の各種類に適した手法を用いて，中間成果物間の基本依存関係を生成する．ステップ 2 では，基本依存関係の追跡による変更波及解析を行う．このため，基本依存関係の両端にくる中間成果物の種類には依存しない．

[1] Eclipse3.2.2 版上で稼働し，GEF3.2.2 版 [25] を必要とする

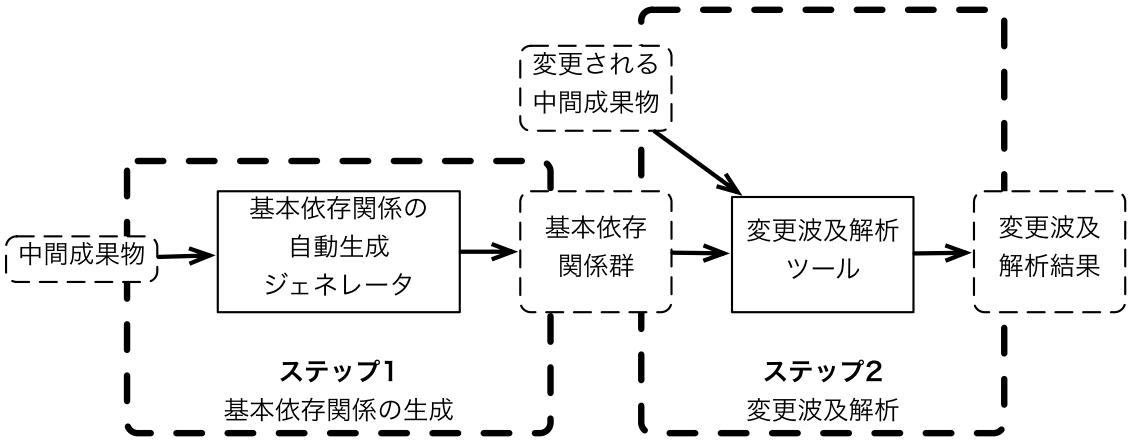

図 9.1: 変更波及解析法の概要

本節では，図9.1で示したステップ1における基本依存関係の自動生成機構を考察し，本ツールの拡張ポイントを検討する．それを用いて，中間成果物の種類に依存しない変更波及解析ツールのフレームワークを定義する．

9.1.1 中間成果物間の基本依存関係生成機構

中間成果物の種類は，本論文で扱ったUML図の他に，それを実装したソースコードなどがある．中間成果物の内容は，各仕様に準拠したものなので，仕様ごとに基本依存関係の自動生成機構が必要となる．図9.1では,「基本依存関係の自動生成ジェネレータ」が自動生成機構に対応する．任意の仕様に対応するため，このジェネレータが本ツールの拡張ポイントとなる．

また図9.2で示すように，基本依存関係の両端にくる中間成果物の種類の組み合わせには，同種の組み合わせと異種の組み合わせがある。この自動生成ジェネレータは，双方の依存関係を自動生成する機構となる．

9.1.2 中間成果物の読み込み

中間成果物の内容はその仕様に準拠しているが，それをファイルに出力する仕様 (以下，記録仕様と呼ぶ) は，‘中間成果物の仕様’ や ‘開発ツール’ の組み合わせによって異なる．

図9.3に示すように，中間成果物は，各 ‘開発ツール’ を利用して作成される．例えば，UML1.5版の図に対応したモデリングツールにはPatternWeaverやBorland Together[5] な

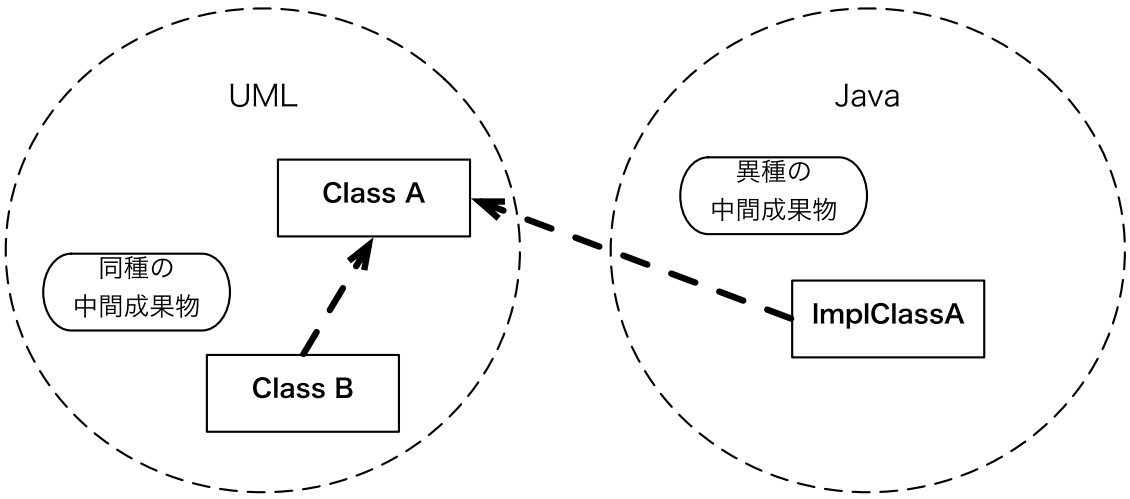

図 9.2: 基本依存関係の両端にくる中間成果物の種類の組み合わせ

どがあり，Java 言語プログラムを記述する支援ツールはテキストエディタや Eclipse などある．これら開発ツールからの記録仕様に従って出力されたものが，中間成果物となる．各開発ツールが用いる記録仕様の定義は，中間成果物の仕様そのもの，または，開発ツールによる定義のどちらかである．

UML 図のモデリングツールは，図面そのものをファイルに記録せず，ツールが図面を再現可能なテキスト形式に変換して記録する．UML 仕様はテキスト表現の ‘記録仕様’ を定義していないため，モデリングツールは，独自の ‘記録仕様’ を用いて中間成果物を出力する．そのため，開発ツールによって中間成果物のフォーマットが異なる場合がある[2]．

また，Java や C++はオブジェクト指向言語の仕様であり，これらは ‘記録仕様’ でもある．例えば，Eclipse を用いて作成された Java 言語ファイルを，テキストエディタを用いて読み込み，編集することが可能である．このように，オブジェクト指向言語はテキスト形式で記述でき，これらの記録仕様も同じくテキスト形式である．

以上より，中間成果物の記録仕様は ‘中間成果物の仕様’ と ‘開発ツール’ の組み合わせによって異なる．さまざまな出力仕様に対応できるように，各組み合わせによって作られた中間成果物を，ツールが読み込み可能なフォーマットへ変換するコンバータを作成する必要がある．そのため，変更波及解析ツールは，中間成果物のコンバータを持つ必要があり，この中間成果物のコンバータをツールの拡張ポイントとする．

[2] UML2.0 版では，図の ‘記録仕様’ である Diagram Interchange が定義されたため，今後，これを出力フォーマットとして利用されると考える．

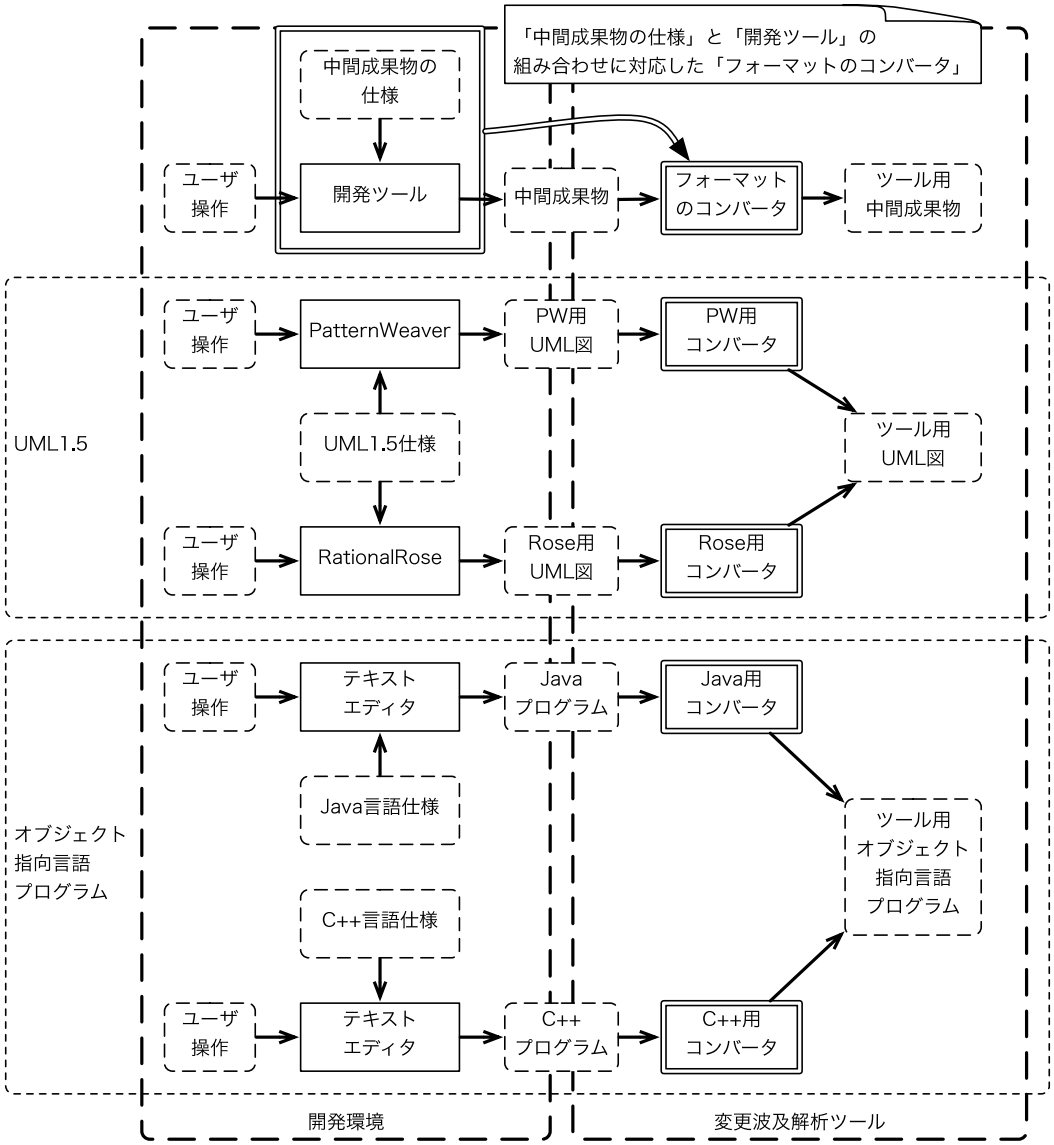

図 9.3: 中間成果物の読み込み

9.1.3 フレームワークの定義

前節より，以下の 2 種類の拡張ポイントを得た.

- 中間成果物の仕様に適した基本依存関係ジェネレータ
- ツール用の中間成果物へ変換するコンバータ

これらを用いて，変更波及解析ツールのフレームワークを図 9.4 のように構成した.

- **最下層:コア層**　基本依存関係の追跡による変更波及解析

- **中間層:依存関係生成層**　本ツール用の中間成果物間の基本依存関係の生成
- **最上層:成果物リーダ層**　中間成果物から本ツール用の中間成果物の生成

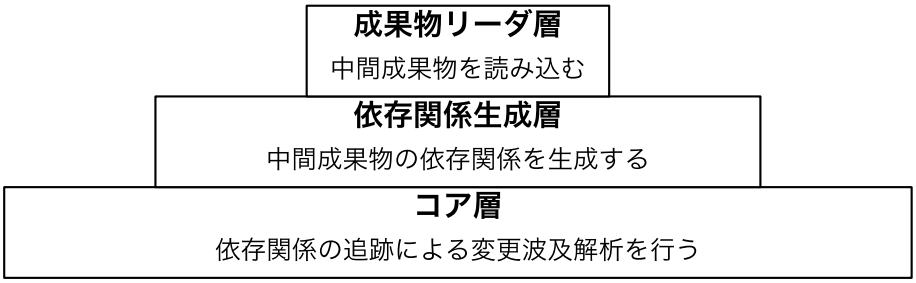

図 9.4: フレームワーク

このツールで拡張可能な機能は，“依存関係を生成可能な中間成果物の種類の追加” と，“読み込め可能なファイルの種類の追加” である．“依存関係生成層” は，依存関係を生成可能な中間成果物の種類を決定し，“成果物リーダ層” は，読み込み可能なファイルの種類を決定する．

9.1.4　プラグイン構造

Eclipse はプラグインによる拡張機構を持っており，それを利用することで Eclipse の機能を追加できる．例えば，Eclipse プラグインの 1 つである EclipseUML[7] は，UML 図を描画できる機能を Eclipse に追加する．本ツールも同様に，Eclipse の拡張機構を利用し，前節のフレームワークに基づいて，図 9.5 のように 3 種類の Eclipse プラグインを実装した．

コア層に対応するプラグインとして，変更波及解析ツールプラグインを作成した．このプラグインは，プロセス情報の編集エディタの機能と，変更波及解析・表示機能を持ち，図 9.7 に示す，本ツールのユーザインタフェースを提供する．

依存関係生成層に対応するプラグインとして，UML 図の基本依存関係生成ツールプラグインを実装した．このプラグインは，フェーズに UML 図を追加することを可能にし，それらの間の基本依存関係を生成する．

成果物リーダ層に対応するプラグインとして，PatternWeaver ファイルリーダプラグインを実装した．このプラグインは，UML 図モデリングツールの 1 つである PatternWeaver で作成された UML 図を読み込み，ツール用のフォーマットへ変換する機能を持つ．

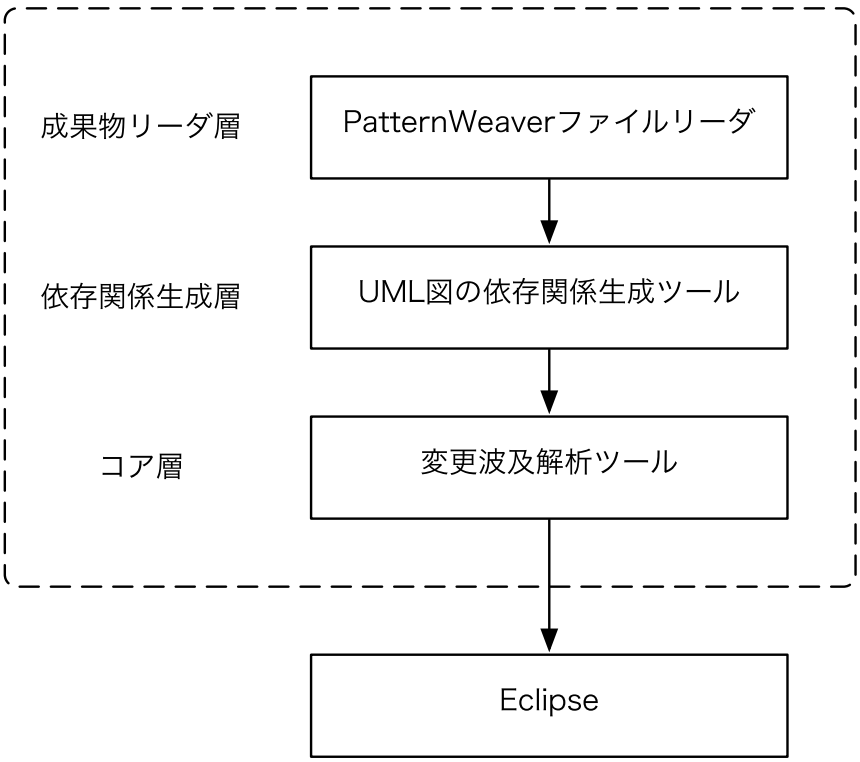

図 9.5: プラグインの依存関係

9.2 機能

本ツールの主な機能は，以下の 3 種類である．

- プロセス情報のエディタ
- PatternWeaver で作成された図の依存関係の生成
- 生成された依存関係を利用した変更波及解析

本節では，各機能の詳細を述べ，それぞれの利用方法を示す．

9.2.1 プロセス情報エディタ

図 9.6 に，依存関係の自動生成法の概要を再掲する．図 9.6 で示すように，依存関係を生成するために必要な情報は，プロセス情報と UML 図面群である．その 1 つであるプロセス情報を作成するためのプロセス情報エディタを作成した．このエディタは，編集するための道具を並べるパレットを持ち，そこに「フェーズ」と「トレース」を作成するための

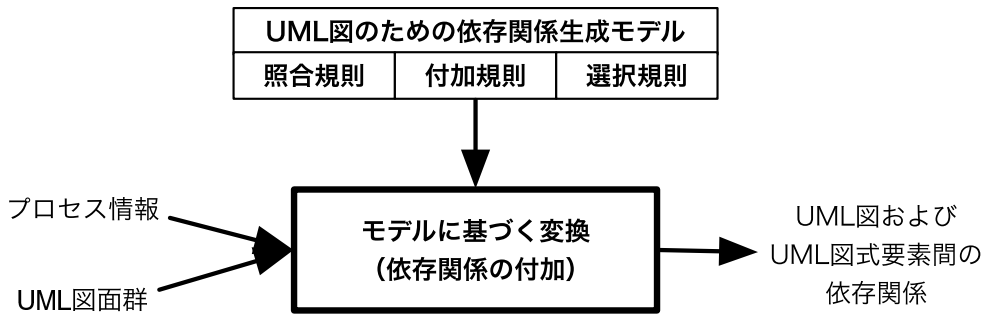

図 9.6: 依存関係の自動生成法の概要 (再掲)

ボタンがある．そのインタフェースを図 9.7 に示す．このエディタを利用して行う作業を以下に列挙する．

フェーズの作成

「フェーズ」ボタンを選択した後，エディタ上の任意の位置でクリックすると，その場所にフェーズを作成できる．図 9.7 では，パッケージの形をした 2 つのフェーズ「request」と「analysis」が存在する．

トレースの作成

「トレース」ボタンを選択した後，ソース，ターゲットに対応するフェーズの順に選択すると，選択されたフェーズ間にトレースを作成できる．図 9.7 では，フェーズ「request」から「analysis」へトレースが存在する．

UML 図の登録

フェーズで作成された図の登録には，PatternWeaver で作成された図のリストを表示する‘ダイアグラムビュー’を利用する．ダイアグラムビューは，UML モデリングツールで作成されたファイルを解析し，そのファイルに含まれる UML 図面の名前を表示する．UML 図の名前をフェーズ上へドラッグすると，そのフェーズにドラッグされた UML 図を登録できる．図 9.7 では，左下にダイアグラムビューがあり，右上のエディタ上の各フェーズにそれぞれ 2 枚の図が作成されたことを示す．

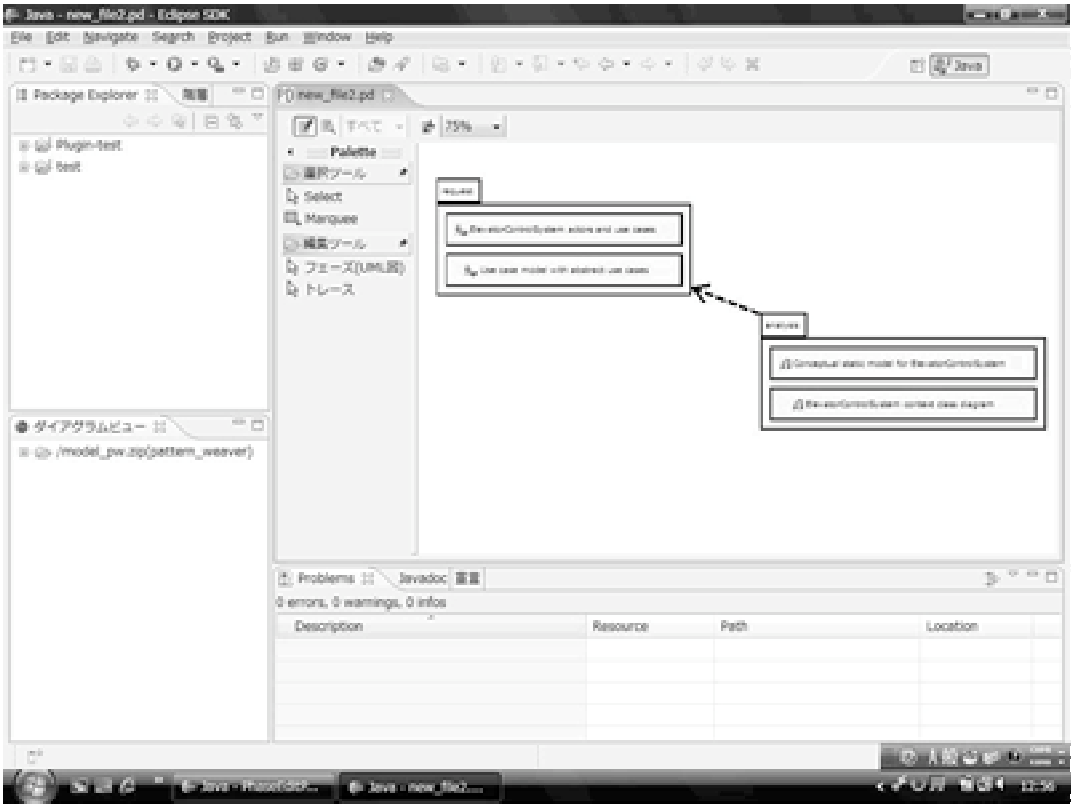

図 9.7: ユーザインタフェース

9.2.2 基本依存関係の自動生成

UML 記述間の基本依存関係の生成は，変更波及解析をするときに行われる．

ユーザによって定義されたプロセス情報と UML 図面群を利用し，提案手法を用いて，UML 記述間の基本依存関係が生成される．生成された基本依存関係は，UML 図があるディレクトリに XML ファイルとして出力される．

9.2.3 変更波及解析表示

7 章で述べたとおり，変更波及解析は基本依存関係を追跡することによって行われる．変更される UML 記述がダブルクリックで指定されると，UML 記述間の基本依存関係が生成され，指定された UML 記述から基本依存関係を追跡して，変更波及解析が行われる．このとき図 9.8 のように，各要素の背景色が変化して，変更波及の影響をうける UML 記述を認識できる．追跡された基本依存関係の種類によって，各要素の背景色を変えて表示することも可能である．

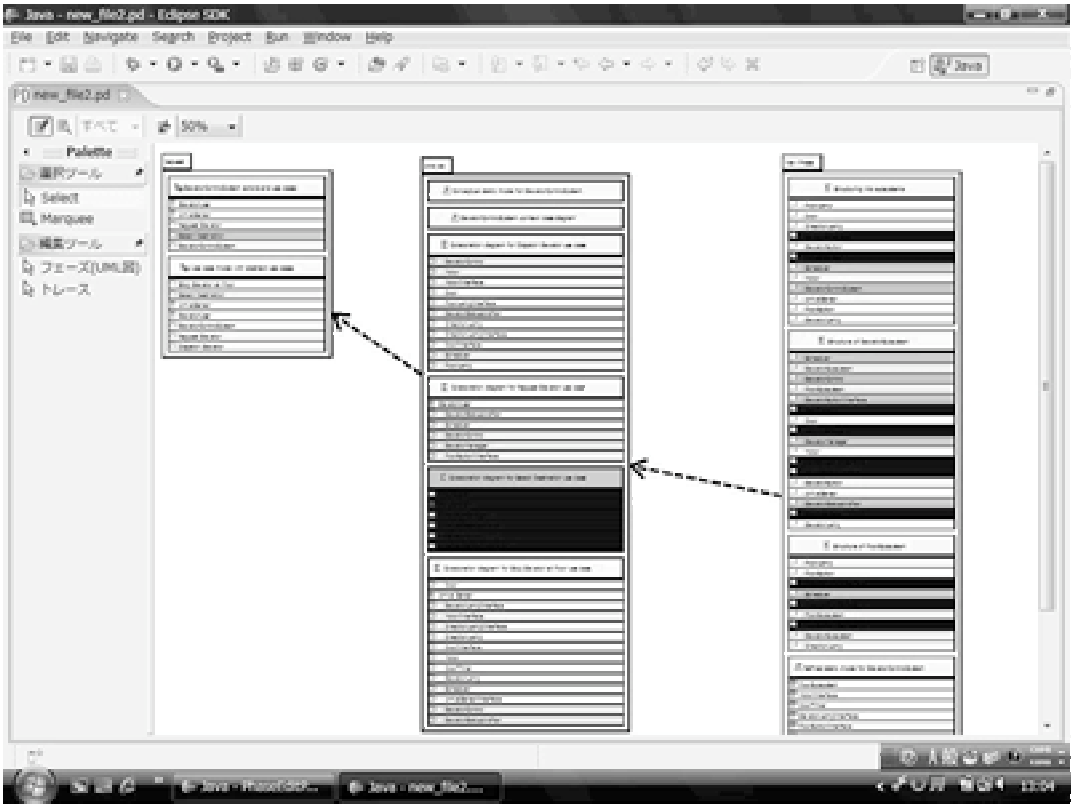

図 9.8: 変更波及解析表示

9.3 拡張例

変更波及解析ツールの拡張例として，UML 図式要素に対応する Java 実装クラス群の抽出プラグインを紹介する．我々は文献 [28] において，UML 図式要素に対応する Java 実装クラス群（以下，協調クラス群と呼ぶ）を抽出するアルゴリズムを提案し，本ツールのプラグインとして実装した．本節では，その抽出アルゴリズムの概要と実装方法を述べる．

9.3.1 Java 協調クラス群の抽出

UML 図式要素と Java クラス群の対応付けるために，責務と協調の概念を導入する．

9.3.1.1 責務と協調

責務と協調の概念を図 9.9 に示す．

責務を「名前で抽象された，UML 図式要素やクラスが単体で担う機能」と定義する．クラスが作成されるとき，作成者は割り当てる機能を踏まえて名前をつけることが多い．そ

のためUML図式要素の名前は，その機能を抽象して表現される．例えば，図9.9において，「ボタンが押されたことを感知する」という責務は，UML図式要素‘FloorButtonInterface’という名前に抽象化されている．同様に，実装されたJavaクラスも責務を持つ．

協調を「複数のクラスやモデルが通信してある機能を果たすこと，またはその機能」と定義する．例えば，図9.9のUML図式要素‘FloorButtonInterface’と‘Scheduler’は，互いに呼び出しあいフロアサブシステムの機能を実現する．同様に，Javaクラス間の通信によって特定の機能を実現するため，複数のJavaクラスも協調を持つ．

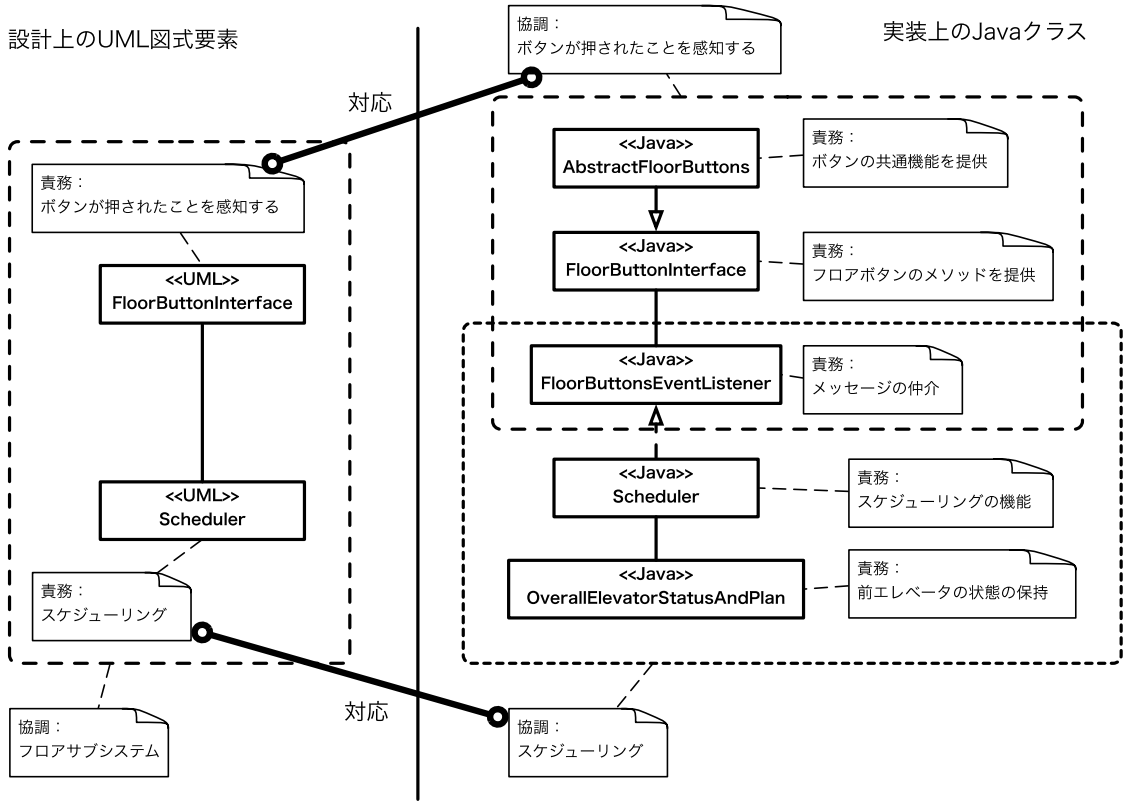

図 9.9: 責務と協調

9.3.1.2　対応付けの基本方針

UML図式要素の責務の実装は，以下の手順で行われると仮定した．

1. UML図式要素の名前を持つJavaクラスの実装
2. そのクラスを補助する複数のJavaクラスの実装

このとき作られた Java クラス群の協調が UML 図式要素の責務と一致するため，UML 図式要素の責務と Java クラス群の協調を対応付ける．

UML 図式要素の責務を実現するために協調する Java クラス群を，協調クラス群と定義する．協調クラス群の中心となる，UML 図式要素の名前と同じ Java クラスを，協調クラス群のコアと定義する．

9.3.2 Java クラス間の関係

Java クラス間には，呼び出しや継承などのさまざまな関係が存在する．本節では，表 9.1 に示す，3 種類の Java クラス間の関係を定義する．

表 9.1: 協調範囲算出に利用する Java クラス間の関係

関係の名前	ソース上の記述例	実現方法	関係の表記

汎化・実現	public class **SourceClass**
	extends **TargetClass** {
	・・・
	}
		extends,
		implements
			T ◁- - - - S
			T ◁——— S

集約	public class **TargetClass** {
	private **SourceClass** s;
	・・・
	}
		メンバー変数	T ◇——— S

インスタンス化	public class **TargetClass** {
	public void methodA() {
	SourceClass s;
	s = new **SourceClass**();
	・・・
	}
	}
		コンストラクタの
		呼び出し
			T ——— S

＊T…TargetClass、S…SourceClass

9.3.2.1 関係の種類

Java クラス間の 3 種類の関係を定義した．

- **汎化・実現**　‘extends’，‘implements’ によって接続された Java クラス間の関係
- **集約**　フィールド宣言や内部クラス宣言により接続された Java クラス間の関係
- **インスタンス化**　new 演算子によって接続された Java クラス間の関係

9.3.2.2　関係の強さ

‘変更に関するまとまり’という観点から，関係の強さを表 9.2 のように定義する．

表 9.2: Java クラス間の関係の強さ

関係の強さ	関係の名前	理由
1 (最も強い)	汎化・実現	サブクラスの責務を完全なものにするため
2	集約	関連元クラスの内部パラメータとなり、関連元クラス以外で使われないことがあるため
3 (最も弱い)	インスタンス化	メッセージの送信が可能になるため

最も強い関係は汎化・実現である．汎化・実現の関係で結ばれたサブクラスの責務は，すべてのスーパークラスの責務を持つ．そのため，スーパークラスとサブクラスの間には協調が成り立ち，UML 図式要素が変更されると，これらのクラスも変更される可能性がある．これより，汎化・実現を最も強い関係と定義する．

次に強い関係は，集約である．集約は関連先クラスが関連元クラスの内部パラメータとなり，関連元クラス以外で使われないことがある．よって関連元クラスの責務が変更される場合，関連先クラスの責務も変更される可能性がある．ただし，関連先クラスは，関連元クラスの責務を持たないため，協調する可能性は汎化・実現より低くなる．

最も弱い関係はインスタンス化である．インスタンス化によって関連元クラスから関連先クラスへメッセージの送信が可能となる．関連元クラスとの関係を示す特徴が他にないため，インスタンス化は変更のまとまりに関して最も弱い関係になる．

9.3.3　協調クラス群抽出アルゴリズム

クラス間の関係を利用した，協調クラス群の抽出アルゴリズムを述べ，図 9.10 に示す．

協調クラス群抽出アルゴリズムは以下の 4 ステップからなる．

1. UML 図式要素の名前と一致する協調クラス群のコアを見つける
2. コアから，汎化・実現の関係を追跡し，継承グループを作成する
3. 継承グループの各クラスから‘追跡ルール’に従い関係を追跡する

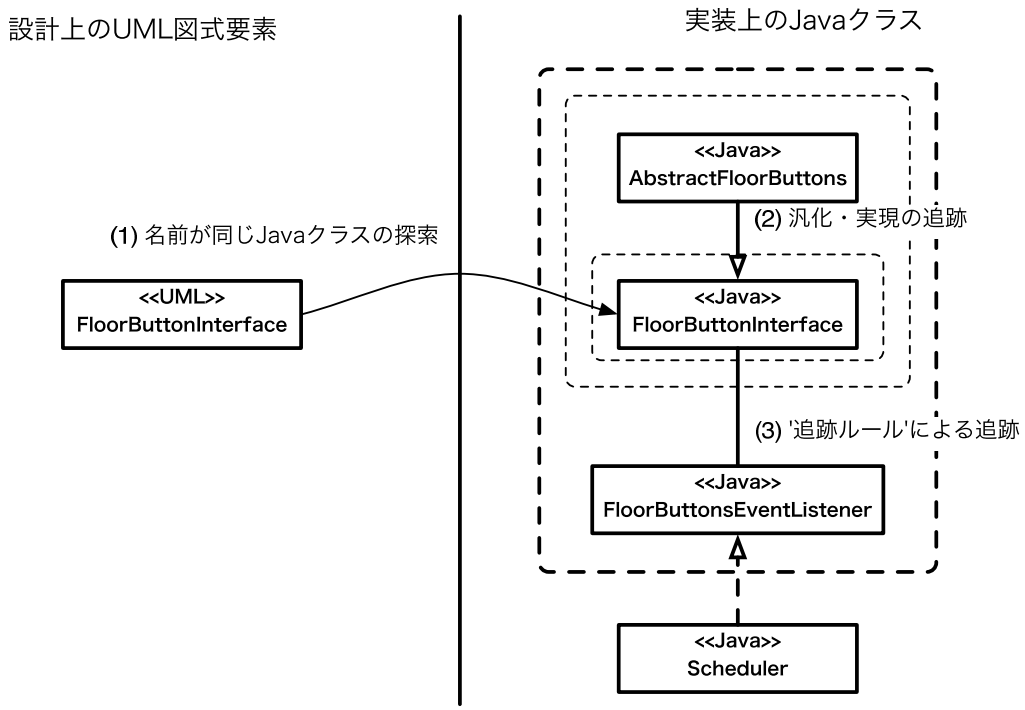

図 9.10: 協調クラス群抽出アルゴリズムの概要

4. 追跡可能な関係が無くなるまで，3 を繰り返す

上記ステップ 3 で利用する ‘追跡ルール’ を以下に示す．これは，関係を追跡するかどうかを決定するルールである．

1. 汎化・実現は関連元・関連先どちらからでも追跡できる
2. 追跡先がコアだった場合，追跡しない
3. インスタンス化を追跡するとき，インスタンス化するクラスが他の継承グループに含まれていたら，追跡しない

9.3.4 精度

この手法の有効性を評価するため，以下の 4 種類のプログラムを利用して実験を行った．

1. **デザインパターンのサンプルプログラム**　文献 29 のサンプルプログラムに適用し，GoF の 23 個のデザインパターンにどれだけ対応しているか評価する．デザインパターンはモデルをクラスに写像するときに使用されるパターンであり，協調クラス群になる可能性が高いため，デザインパターンに対する高い抽出精度が望まれる．

2. **エレベータ制御システム**　提案手法の評価にも用いた文献 9 のエレベータ制御システムの設計図を基に作成したプログラムに適用した．このプログラムの特徴は，汎化・実現の関係が多いことである．

3. **協調クラス群抽出ツール**　小規模プログラムへの適用として，本ツール自身を適用する．

4. **図書管理システム**　本研究室で稼働中である図書管理システムへ適用する．このプログラムは 1000 行程度のコードであり，この特徴は汎化・集約・インスタンス化など多用な関係が存在することである．

適用した結果，すべてのプログラムにおいて，再現率，適合率とも 80 %以上の値を得ることができた．

9.3.5　プラグインの位置づけ

Java ソースコードの協調クラス群抽出プラグインは，Java ファイルリーダプラグインと，協調クラス解析ツールプラグインの 2 つで構成される．本節では，変更波及解析ツールのプラグイン構造における，Java 協調クラス群抽出プラグインの位置づけを述べる。図 9.11 に，本ツールのプラグイン構造における，Java 協調クラス群抽出ツールプラグインの位置づけを示す．

Java ファイルリーダプラグインは，本ツールのフレームワークにおける “成果物リーダ層” に対応するプラグインである．このプラグインは，Java 言語プログラムを本ツール用のフォーマットへ変換するプラグインである．

協調クラス群解析ツールプラグインは，本ツールのフレームワークにおける “依存関係生成層” に対応するプラグインである．このプラグインは，本章で述べた解析アルゴリズムを用いて協調クラス群を生成し，UML 図および Java クラス間に基本依存関係を生成するプラグインである．そのため，このプラグインは ‘変更波及解析ツール’ の他に，‘UML 図の依存関係生成ツール’ を利用する．

また，“成果物リーダ層” に対応するプラグインとして，例えば ‘C++ファイルリーダ’ を追加することによって，C++ソースコードへの変更波及解析が可能になる．

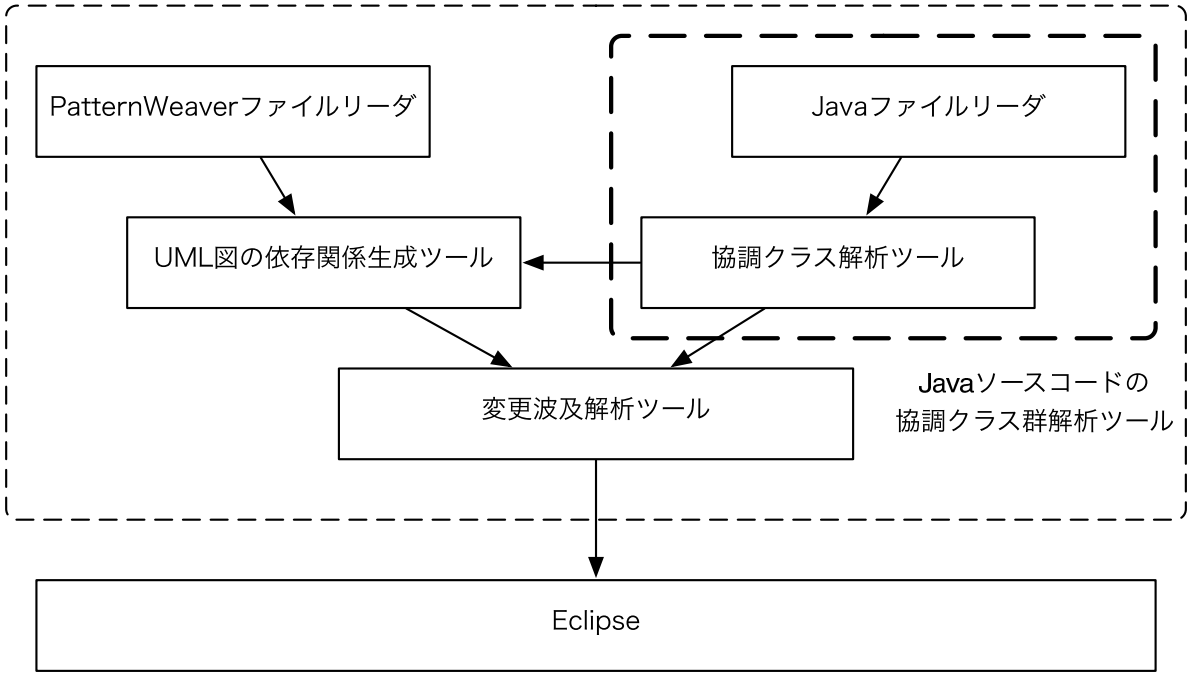

図 9.11: ツールの拡張例

第 10章

議論

現在 UML2.0 が公開され，使われ始めている．本節では，本論文で提案した基本依存関係と依存関係生成モデルが UML2.0 に対してどの程度有効であるのかを検討する．

10.1 基本依存関係の有効性

はじめに基本依存関係の有効性を検討する．本論では，依存関係の分析対象を UML1.5 版のメタモデル要素 “Dependency” のサブクラスとした．UML2.0 版の分析対象を同様としたとき，分析対象はメタモデル要素 “Dependency” のサブクラスである “Abstraction” と “Usage” である[1] ．UML2.0 版では，両依存関係のステレオタイプ[2] は変更されたが，そのセマンティクスの定義は変更されていない．また，開発作業の考察から定義された基本依存関係は，作成される図の版に非依存である．ここで，2 節において定義した基本依存関係とそれらを導出した依存関係の型の対応を表 10.1 にまとめた．最左列には，メタモデル要素 “Dependency” の 4 種類のサブクラスと，開発作業から 2 種類の依存関係が発生する状況が並んでいる．中央列には，本論の対象とした UML1.5 版において，最左列の依存関係・状況から導出された基本依存関係が並んでいる．最右列には，UML2.0 版において，UML1.5 版の分析結果から流用できる基本依存関係を示す．最下行に，各版の基本依存関係の種類の数を示す．その数は両版とも 4 となり，種類の数は UML2.0 においても同じである．以上より，本論で定義した基本依存関係が UML2.0 においても利用可能であると考えられる．

[1] UML2.0 版における “Binding” と “Permission” の定義は，単なる単方向矢印と改められた

[2] UML2.0 版ではキーワードと呼ばれる

表 10.1: 版による依存関係の違い

		UML1.5	UML2.0
UMLの依存関係	Abstraction	同一概念	同一概念
	Binding	情報共有	ー
	Permission	情報共有	ー
	Usage	生存従属、情報共有	生存従属、情報共有
開発作業の依存関係	コピーされたもの	コピー	コピー
	包含関係の記述	生存従属	生存従属
基本依存関係の種類		4種類	4種類

10.2 依存関係生成モデルへの拡張可能性

つぎに，UML2.0 の図面に対応可能な依存関係生成モデルへの拡張可能性を述べる．依存関係生成モデルを構成する 3 規則のうち，照合規則と選択規則は，UML 記述の名前と包含関係を利用する．そのため，UML2.0 の UML 記述に対応するルールを追加することは容易である．また，付加規則には，追加された図に対応する生成モデル要素の定義が必要となると考える．UML2.0 では，フレームの導入や，既存の図式要素の複合など，記述の参照や統合を可能にする仕様の拡張が行われた．これらの拡張は，既存の図式要素で用いられる包含や名前による参照など，照合規則で用いた特性を利用したものである．そのため，必要な生成モデル要素と基本依存関係を付加規則に追加することで UML2.0 に対応可能であると考えている．

以上より，本研究で提案した基本依存関係および，依存関係生成モデルによる自動生成のアプローチは UML2.0 にも適用可能であると判断する．なお，UML2.0 に対する拡張は今後の課題とする．

第 11 章

関連研究

変更作業支援のため，変更の対象となる中間成果物の量と順序を予測する様々な手法が提案されている．例えば，(1) 形式言語 OCL によって記述された波及ルールを用いる手法がある [13]．波及ルールとは，変更された要素と波及する要素間の関係をルールで定義したものであり，OCL で記述される．まず変更の起点となる波及ルールを適用することで，波及解析が可能となる．また，(2) 中間成果物間のトレース依存関係を適切に設定するための指針を整備した研究もある [2, 8, 22]．その多くは，トレース依存関係の分類を行っており，実際のトレース依存関係の設定は，開発者に任される．(1)(2) の手法では，波及ルールやトレース依存関係は開発者自身が記述する必要があり，また，それらのメンテナンスコストも大きい．それらのコストを軽減するため，(3) 情報検索技術を利用する手法も提案されている．この手法では，UML 図やソースコードのキーワードを用いて波及解析を行うため，さまざまな種類の中間成果物に適用可能であるが，実際に波及しない中間成果物を多く含むという欠点を持つ [19]．また，この手法は，文章が不完全なものやタイトルがない文書群にも適用可能という優位な点を持つ．文献 12 においては，実際的なデータをもとに評価実験を行い，情報検索技術を適用した場合，再現率や適合率がどの程度の値になるかを示す興味深い報告が行われている．

(2) の手法において，依存関係の設定と波及解析の自動化に関する研究も行われている．例えば，Antje らが開発した波及解析ツール QuaTrace[3] がある．変更波及解析に利用する中間成果物間の関係を，表記方法が異なる中間成果物間の関係を意味する ‘表現関係’，ある中間成果物とそれを具象化した中間成果物間の関係を意味する ‘改良関係’，ある中間成果物とそれを作成するのに必要となる中間成果物間の関係を意味する ‘依存関係’ に分類している．これらの分類のもとに，基本的には文書の名前を利用してトレース情報を生成す

る．波及解析ビューワは，表現関係，改良関係，依存関係を利用して，それらのトレース情報を分類する．

その他，Unified Process で定義されたモデル間の依存関係を形式的に表現する研究 [6]，依存関係に変更に役に立つ情報を付加した参照モデルの提案 [4] や，分散したコンポーネント間に発生する依存関係の定義 [1] などの研究がある．

また，本論文は，基本依存関係を自動生成するために UML モデルの分類を行った．このような特定の視点に特化した UML モデルの分類はいくつか行われている．8.5.2 節ですでに詳細な比較を行ったが，例えば，Jane らはプロダクトライン開発に特化した UML モデルの分類を提案し [12]，大西は UML モデルの検証に特化した UML モデルの分類を提案した [30]．

第 12章

おわりに

12.1 まとめ

本論文では，UML1.5 版のモデル要素として定義された依存関係を検討し，変更波及解析に有用な基本依存関係 (情報共有，同一概念，生存従属，コピーの 4 つ) を新たに定義した．また，そのような依存関係を依存関係生成モデルを適用して自動生成する手法を提案した．

COMET 法によるエレベータ制御システムと ATM システムの事例研究を題材として，要求定義から設計段階までの UML 図面群において，提案した依存関係の自動生成法が有用性と現段階での適用の限界を示した．

提案手法を実装したツールを設計・実装し，さまざまな種類の中間成果物に対応するための追加可能性を示す例として，UML 図に対応する Java 実装クラス群の抽出ツールを設計・実装した．

12.2 今後の展望

本論文は UML1.5 版を対象とした．現在 UML2.0 版 [16, 17] が公開され，使われ始めている．本研究で提案した基本依存関係および，依存関係生成モデルによるアプローチは UML2.0 に対しても有効であると考えている．このためには，構造化 Classifier に基づくクラスやコンポーネントなどの UML 図式要素や，タイミングチャート図など新しく導入された図面の取り扱いが可能となるように，本論文で提案した依存関係生成モデルを拡張する必要があり，今後の課題である．

また，変更波及解析は共同ソフトウェア開発における変更作業を支援することが可能であると考える．図 12.1 に，その支援方法の概要を示す．本論文は，UML 図面を対象に依存関係を自動生成する手法およびツールを提案し，Java プログラムの協調クラス群の抽出手法について紹介した．本手法で自動生成された依存関係を追跡して得られる変更波及解析結果は，未来の変更作業の予測である．そのため，この結果を利用することで，共同開発者との作業の同期をとることが容易になると考え，作業制御の一方式を [27] において提案した．今後，提案手法を用いた共同ソフトウェア開発の変更支援システムの構築・運用されることを期待する．

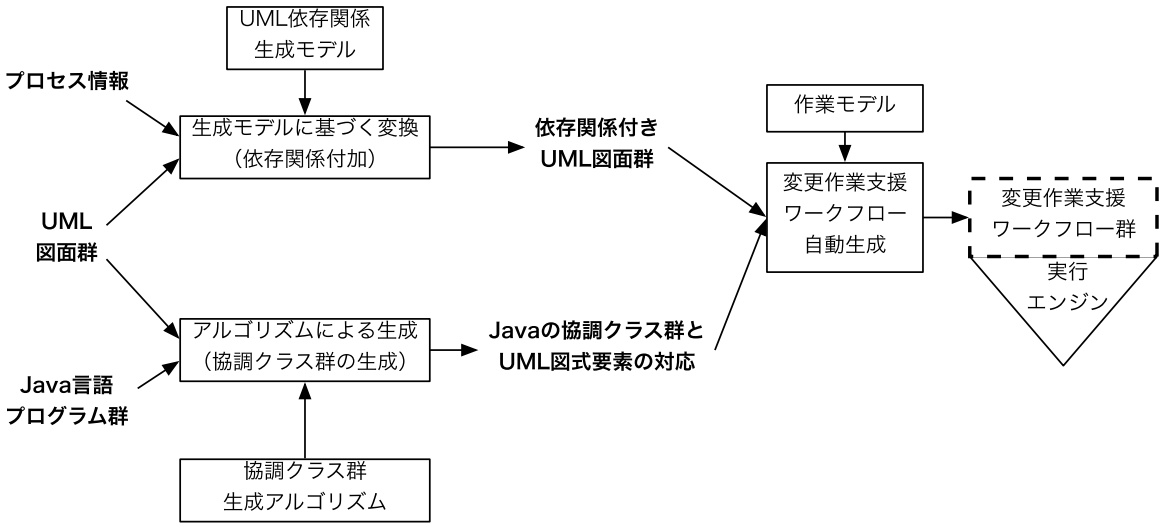

図 12.1: 本手法の共同ソフトウェア開発への適用

謝辞

本研究を行なうに当たり, 終始御指導を賜わった落水 浩一郎教授に深謝致します．また，博士論文審査において有益な御助言，御指導を賜りました片山卓也教授，岸 知二 特任教授，鈴木 正人准教授，東京工業大学 佐伯 元司教授に深く感謝いたします.

また, 日頃から有益な御助言をいただき, 多面に渡って励ましていただいた，服部 哲 助教，藤枝 和宏 助教に感謝致します.

変更波及解析ツールの実装にあたってご協力いただいた，日本ヒューレットパッカード 菅井 拓海 氏に感謝いたします.

本論文をまとめるにあたって御協力いただいた落水・鈴木研究室の諸兄に厚く御礼申し上げます.

また，私を陰ながら励ましてくれた学部時代の同期および後輩達に厚く御礼申し上げます.

最後に，私のわがままを受け入れ，支援していただきました家族に厚く御礼申し上げます.

参考文献

[1] Alexander Keller, Uri Blumenthal and Gautam Kar.: Classification and Computation of Dependencies for Distributed Management, *Proc. of the 5th IEEE Symposium on Computers and Communications (ISCC 2000)*, pp78-83, 2000.

[2] Anna Rita Fasolino, Giuseppe Visaggio.: Improving Software Comprehension through an Automated Dependency Tracer, *7th International Workshop on Program Comprehension*, 1999, pp.58-65.

[3] Antje von Knethen, Mathias Grund.: QuaTrace : A Tool Environment for (Semi-) Automatic Impact Analysis Based on Traces, *19th IEEE International Conf. on Software Maintenance (ICSM'03)*, pp.246-255, 2003.

[4] Balasubramaniam Ramesh and Matthias Jarke : Toward Reference Models for Requirements Traceability, *IEEE Trans. on Software Eng., vol 27, No. 1*, pp.58-93, 2001.

[5] Borland®Together®, http://www.borland.com/jp/products/together/

[6] Claudia Pons, Roxana Giandini and Gabriel Baum : Dependency Relations Between Models in the Unified Process, *Proc. of the 10th intl. Workshop on Software Specifiaction and Design (IWSS'00)*, pp.149-157, 2000.

[7] EclipseUML, http://www.omondo.com

[8] Giuseppe Visaggio: Structural Information as a Quality Metic in Software Systems Organization, *Proc. of the 1997 International Conference on Software Maintenance (ICSM'97)*, pp.92-99, 1997.

[9] Hassan Gomma.: *Designing concurrent, distributed, and real-time applications with UML*, Addison Wesley, Inc., 2000.

[10] Holger Rasch and Heike Wehrheim.: Consistency between UML Classes and Associated State Machines, *5th International Conference on the UML*, pp.46-60, 2002.

[11] Ivar Jacobson, Grady Booch and James Rumbaugh.: *The Unified Software Development Process*, Addison Wesley Longman, Inc., 1999.

[12] Jane Huffman Hayes, Alex Dekhtyar, and James Osborne: Improving Requirements Tracing via Information Retrieval, *Proc. of the 11th IEEE Intl. Requirements Engineering Conference*, pp. 138-147, 2003.

[13] L. C. Briand, Y. Labiche, L. O' Sullivan.: Impact Analysis and Change Management of UML Models, *19th IEEE International Conf. on Software Maintenance (ICSM'03)*, pp. 256-265, 2003.

[14] Lisa Cox, Dr. Harry S. Delugach.: Dependency Analysis Using Conceptual Graph, *Proc. 9th Intl. conf. on Conceptual Structures*, pp.117-130, 2001.

[15] Object Management Group., Unified Modeling Language (UML), version 1.5, http://www.omg.org/cgi-bin/doc?formal/03-03-01

[16] Object Management Group., UML Superstructure Specification, v2.0, http://www.omg.org/cgi-bin/doc?formal/05-07-04

[17] Object Management Group., UML Infrastructure Specification, v2.0, http://www.omg.org/cgi-bin/doc?formal/05-07-05

[18] Object Management Group 著, OMG Japan SIG 翻訳委員会 UML 作業部会訳, UML 仕様書, アスキー, 2001.

[19] Raffaella Settimi, Jane Cleland-Huang, Oussama Ben Khadra, Jigar Mody, Wiktor Lukasik, and Chris DePalma.: Supporting Software Evolution through Dynamically Retrieving Traces to UML Artifacts, *Proc. of the 7th Intl. Workshop on Principles of Software Evolution(IWPSE'04)*, pp.49-54, 2004.

[20] パターンウィーバー, http://pw.tech-arts.co.jp

[21] Richard F.Paige, Jonathan S. Ostroff, and Phillip J. Brooke.: Checking the Consistency of Collaboration and Class Diagrams using PVS, *Proc. of 4th Workshop on Rigorous Object-Oriented Methods(ROOM4)*, 2002.

[22] Shuhaimi Ibarahim Norbik Bashah Idris, Malcolm Munro, and Aziz Deraman: A Software Traceability Validation For Change Impact Analysis of Object Oriented Software, *The 2006 World Congress in Computer Science Computer Engeneering, and Applied Computing(SERP'06)*, pp.453-459, 2006.

[23] S. S. Yau, J. S. Collofello, and T. MacGregor.: Ripple Effect Analysis of Software Maintenance, *Proc. IEEE COMPSAC*, pp. 60-65, 1978.

[24] The Eclipse Foundation. : Eclipse, http://www.eclipse.org/eclipse/

[25] The Eclipse Foundation. : Graphical Editing Framework(GEF), http://www.eclipse.org/gef/

[26] Waraporn Jirapanthong and Andrea Zisman: Supporting Product Line Development through Traceability, *Proc. of the 12th Asia-Pacific Software Engineering Conference (APSEC05)*, pp.506-514, 2005.

[27] 小谷 正行, 落水 浩一郎: "ソフトウェア共同開発におけるワークフロー実行制御の一方式", 電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 SS2005-88, pp.31-36, 2006.2.

[28] 菅井 拓海, 小谷 正行, 落水 浩一郎: "UML 図面要素に対応する Java 協調クラス群の抽出ツール", 情報処理学会 第 155 回ソフトウェア工学研究会, 2005-SE-155, pp113-118, 2007.3.

[29] 結城浩, Java 言語で学ぶデザインパターン入門, ソフトバンクパブリッシング株式会社, 2003.

[30] 大西淳, UML における整合性検証支援システム, 電子情報通信学会論文誌 *Vol. J84-D-I No.6*, pp.671-681, 2001 年 6 月.

本研究に関する発表論文

[1] 小谷 正行, 落水浩一郎: “UML 記述の変更波及解析に利用可能な依存関係の自動生成法”, 情報処理学会, 投稿中

[2] 小谷 正行, 菅井 拓海, 落水 浩一郎: “UML 図の変更波及解析ツール”, 電子情報通信学会, ソフトウェアサイエンス研究会, 信学技報, vol. 107, no. 4, SS2007-7, pp. 35-39, 2007.4.

[3] 菅井 拓海, 小谷 正行, 落水 浩一郎: “UML 図面要素に対応する Java 協調クラス群の抽出ツール”, 情報処理学会 第 155 回ソフトウェア工学研究会, 2005-SE-155, pp113-118, 2007.3.

[4] 小谷 正行, 落水 浩一郎: “UML 図面群の変更波及解析に利用可能な依存関係の自動生成法”, JAIST Research Report, IS-RR-2006-002.

[5] 小谷正行, 落水浩一郎: “ソフトウェア共同開発におけるワークフロー実行制御の一方式”, 電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 SS2005-88, pp.31-36, 2006.2.

[6] 金 旭東, 早坂 良, 小谷 正行, 落水 浩一郎: “メタパターンを用いた Java ソースコードにおける協調クラス群の抽出”, 情報処理学会第 150 回ソフトウェア工学研究会, 2005-SE-150(13), pp101-108, 2005.11.

[7] 小谷 正行, 落水 浩一郎: “依存関係を用いた UML 文書間の波及解析法”, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会 SS2004-62, pp37-41, 2005.03.

[8] Masayuki Kotani, Koichiro Ochimizu: “Generating Dependency Relationships among UML Model Elements for Impact Analysis of UML Documents”, ISFST2004, pp.230-235, 2004.10.

[9] 小谷 正行, 落水 浩一郎: “UML 文書における変更作業支援のワークフローの自動生成法に関する研究”, 日本ソフトウェア科学会第 20 回大会, pp.291-295, 2003.9.

[10] Masayuki Kotani, Koichiro Ochimizu: “Genarating a Workflow for Change Support of UML Documents”, JAIST Research Report, IS-RR-2003-007, ISSN 0918-7553.

[11] 小谷 正行, 落水 浩一郎: “UML 文書変更作業支援のためのワークフロー生成法”, ソフトウェアシンポジウム 2003, pp.64-72, 2003.6.

[12] 小谷正行, 落水浩一郎: “UML 文書の変更管理モデル”, 電子情報通信学会 ソ フトウェアサイエンス研究会, 信学技報 SS2002-41, pp.25-pp.30, 2003 年 1 月.

第 A 章

評価に用いたデータ：エレベータ制御システム

本章では、エレベータ制御システムの分析・設計例を評価に用いるために作成したプロセス情報と、概念と UML 図式要素の対応表を示す.

A.1　プロセス情報

エレベータ制御システムの分析・設計例のプロセス情報を図 A.1 に示す．この開発プロセスは 4 フェーズから構成され，これらのフェーズにおいて 27 枚の UML 図が作成された．図 A.1 では，各図の名前を省略し，各フェーズで描かれた図の型とその番号を示している．例えば，要求フェーズでは，図番号 1, 2 のユースケース図が描かれたことを示している．

A.2　概念と UML 図式要素の対応表

表 A.1 から表 A.3 において，エレベータ制御システムの分析・設計例の概念と UML 図式要素の対応表を示す．例えば，概念 'ArrivalSensor' は，フェーズ「要求定義」で型の側面としてアクター 'ArrivalSensor' を図面 1, 2 に記述されたことを示す.

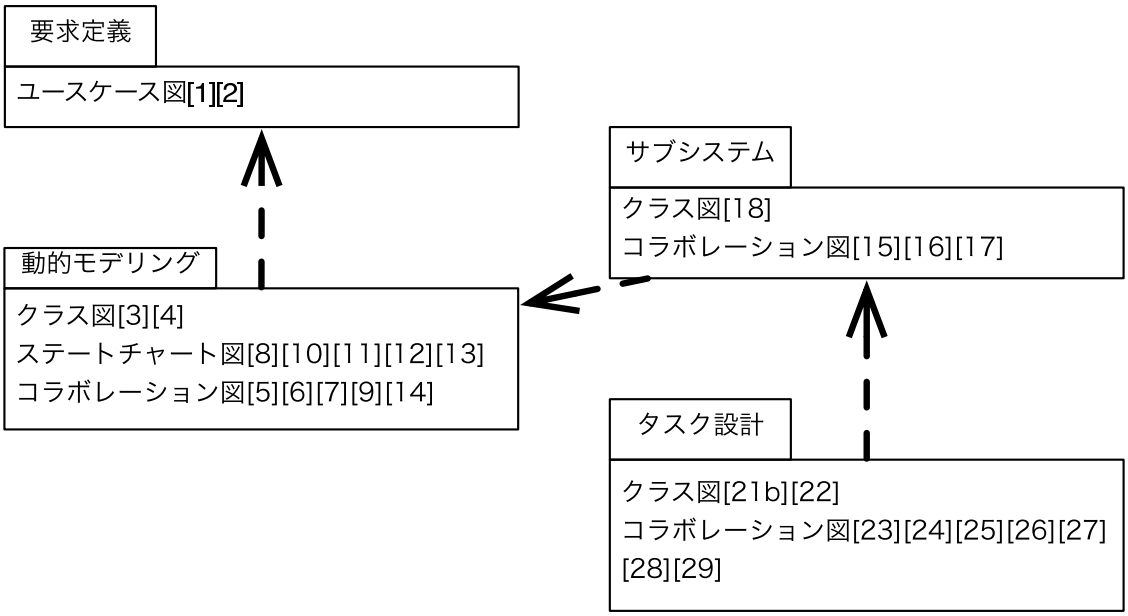

図 A.1: エレベータ制御システムでのプロセス記述の概要

表 A.1: 概念と UML 図式要素の対応表 (1/3)

概念	側面	フェーズ「要求定義」での名前 [描写された図面No]	フェーズ「分析」での名前	フェーズ「サブシステム設計」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ElevatorUser	型	ElevatorUser(A) [1,2]			
	実体		: ElevatorUser(O) [5,6]		
ArrivalSensor	型	ArrivalSensor(A) [1,2]	ArrivalSensor(C) [3,4]		
	実体		:ArrivalSensor(O) [7]	:ArrivalSensor(O) [15, 16]	:ArrivalSensor(O) [22, 23, 24, 29]
ArrivalSensorInterface	型			ArrivalSensorInterface(C) [18]	
	実体		:ArrivalSensorInterface(O) [7, 14]	:ArrivalSensorInterface(O) [16]	
ArrivalSensorTask	実体				:ArrivalSensorsInterface(O) [23, 24]
Select Destination	機能	Select Destination(UC) [1,2]			
Request Elevator	機能	Request Elevator(UC) [1,2]			
Dispatch Elevator	機能	Dispatch Elevator(UC) [2]			
Stop Elevator at Floor	機能	Stop Elevator at Floor(UC) [2]			
Floor	型		Floor(C) [3]		
FloorButton	型		FloorButton(C) [3,4]		
	実体			:FloorButton(O) [15, 17]	:FloorButton(O) [22, 25, 26, 29]
FloorButtonInterface	型			FloorButtonInterface(C) [18]	
	実体		:FloorButtonInterface(O) [6,14]	:FloorButtonInterface(O) [17]	:FloorBottonsInterface(O) [25, 26]
FloorLamp	型		FloorLamp(C) [3,4]		
	実体		:FloorLamp(O) [9]	:FloorLamp(O) [15, 17]	:FloorLamp(O) [22, 25, 26, 29]
FloorLampInterface	型			FloorLampInterface(C) [18]	
	実体		:FloorLampInterface(O) [9, 14]	:FloorLampInterface(O) [17]	FloorLampsMonitor(O) [25, 26]
DirectionLamp	型		DirectionLamp(C) [3,4]		
	実体		:DirectionLamp(O) [7,9]	:DirectionLamp(O) [15, 17]	:DirectionLamp(O) [22, 25, 26, 29]
DirectionLampInterface	型			DirectionLampInterface(C) [18]	
	実体		:DirectionLampInterface(O) [7,9, 14]	:DirectionLampInterface(O) [17]	:DirectionLampsMonitor(O) [25, 26]
Elevator	型		Elevator(C) [3,4]		
ElevatorButton	型		ElevatorButton(C) [3]		
	実体			:ElevatorButton(O) [15, 16]	:ElevatorButton(O) [22, 23, 24, 29]

表 A.2: 概念と UML 図式要素の対応表 (2/3)

概念	側面	フェーズ「要求定義」での名前 [描写された図面No]	フェーズ「分析」での名前	フェーズ「サブシステム設計」 での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ElevatorButtonInterface	型			ElevatorButtonInterface(C) [18]	
	実体		:ElevatorButtonInterface(O) [5,14]	:ElevatorButtonInterface(O) [16]	:ElevatorButtonsInterface(O) [23, 24]
ElevatorLamp	型		ElevatorLamp(C) [3,4]		
	実体		:ElevatorLamp(O) [7]	:ElevatorLamp(O) [15, 16]	:ElevatorLamp(O) [22, 23, 24, 29]
ElevatorLampInterface	型			ElevatorLampInterface(C) [18]	
	実体		:ElevatorLampInterface(O) [7,14]	:ElevatorLampInterface(O) [16]	
Motor	型		Motor(C) [3,4]		
	実体		:Motor(O) [7,9]	:Motor(C) [15, 16]	:Motor(O) [22, 23, 24, 29]
MotorInterface	型			MotorInterface(C) [18]	
	実体		:MotorInterface(O) [7,9,14]	:MotorInterface(O) [16]	
Door	型		Door(C) [3,4]		
	実体		:Door(O) [7,9]	:Door(O) [15, 16]	:Door(O) [22, 23, 24, 29]
DoorInterface	型			DoorInterface(C) [18]	
	実体		:DoorInterface(O) [7,9,14]	:DoorInterface(O) [16]	
DoorTimer	型			DoorTimer(C) [18]	
	実体		:DoorTimer(O) [7,14]	:DoorTimer(O) [16]	
ElevatorManager	型			ElevatorManager(C) [18]	
	実体		:ElevatorManager(O) [5,6, 14]	:ElevatorManager(O) [16]	:ElevatorManager(O) [23, 24]
ElevatorControl	型			ElevatorControl(C) [18]	
	実体		:ElevatorControl(O) [5,6,7,9,14]	:ElevatorControl(O) [16]	:ElevatorController(O) [23, 24]
ElevatorStatus&Plan	型			ElevatorStatus&Plan(C) [18]	
	実体		:ElevatorStatus&Plan(O) [5,6,7,9,14]	:ElevatorStatus&Plan(O) [16]	
LocalElevatorStatus&Plan	型				LocalElevatorStatus&Plan(C) [21b]
	実体				:LocalElevatorStatus&Plan(O) [23, 24]
ElevatorStatus&PlanServer	型			ElevatorStatus&PlanServer(C) [18]	
	実体				:ElevatorStatus&PlanServer(O) [27, 28]
OverallElevatorStatus&Plan	型			OverallElevatorStatus&Plan(C) [18]	OverallElevatorStatus&Plan(C) [21b]
	実体				:OverallElevatorStatus&Plan(O) [27, 28]

表 A.3: 概念と UML 図式要素の対応表 (3/3)

概念	側面	フェーズ「要求定義」での名前 [描写された図面No]	フェーズ「分析」での名前	フェーズ「サブシステム設計」 での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ElevatorScheduler	型			ElevatorScheduler(C) [18]	
	実体				:ElevatorScheduler(O) [27,28]
SchedulerSubsystem	型			Scheduler(C) [18]	
	実体		:Scheduler(O) [5,6,7,9, 14]	:Scheduler(O) [15, 16, 17]	:Scheduler(O) [22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29]
ElevatorControlSystem	型		ElevatorControlSystem(C) [4]		
	実体			:ElevatorControlSystem(O) [15]	:ElevatorControlSystem(O) [22, 29]
ElevatorSubsystem	型			ElevatorSubsystem(C) [18]	
	実体			:ElevatorSubsystem(O) [15, 16, 17]	:ElevatorSubsystem(O) [22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29]
FloorSubsystem	型			FloorSubsystem(C) [18]	
	実体			:FloorSubsystem(O) [15, 16, 17]	:FloorSubsystem(O) [22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29]
Elevator Starting Up	状態		Elevator Starting Up(S) [10, 11, 13]		
Elevator Starting Down	状態		Elevator Starting Down(S) [11, 13]		
Elevator Moving	状態		Elevator Moving(S) [8,10, 11, 13]		
Elevator Stopping	状態		Elevator Stopping(S) [8, 11, 13]		
Elevator Door Opening	状態		Elevator Door Opening(S) [8, 11, 13]		
Elevator at Floor	状態		Elevator at Floor(S) [8, 11, 13]		
Checking Next Destination	状態		Checking Next Destination(S) [8, 10, 11, 12, 13]		
Elevator Idle	状態		Elevator Idle(S) [8, 10, 11, 12, 13]		
Door Closing to Move Up	状態		Door Closing to Move Up(S) [10, 11, 13]		
Door Closing to Move Down	状態		Door Closing to Move Down(S) [11, 13]		
Preparing to Move Up	状態		Preparing to Move Up(S) [12, 13]		
Preparing to Move Down	状態		Preparing to Move Down(S) [12, 13]		
Moving to Floor	状態		Moving to Floor(S) [12, 13]		

＊(UC)…ユースケース、(A)…アクター、(C)…クラス、(O)…オブジェクト、(S)…状態

第 B 章

評価に用いたデータ：ATM システム

本章では、ATM システムの分析・設計例を評価に用いるために作成したプロセス情報と、概念と UML 図式要素の対応表を示す.

B.1 プロセス情報

ATM システムの分析・設計例のプロセス情報を図 B.1 に示す．この開発プロセスは 5 フェーズから構成され，これらのフェーズにおいて 30 枚の UML 図が作成された．図 B.1 では，各図の名前を省略し，各フェーズで描かれた図の型とその番号を示している.

B.2 概念と UML 図式要素の対応表

表 B.1 から表 B.5 において，ATM システムの分析・設計例の概念と UML 図式要素の対応表を示す.

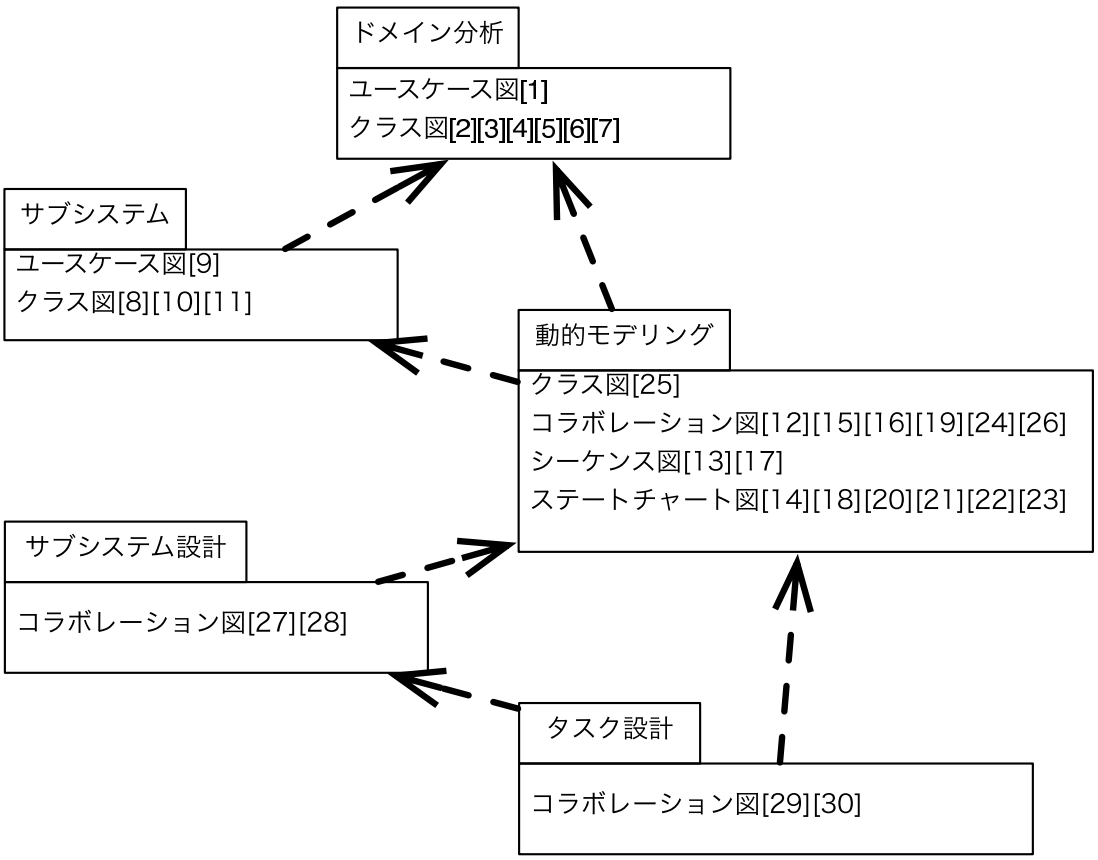

図 B.1: ATM システムの分析・設計例におけるプロセス情報

表 B.1: 概念と UML 図式要素の対応表 (1/5)

概念	側面	フェーズ「要求」での名前 [描写された図面No.]	フェーズ「静的モデリング」での名前	フェーズ「オブジェクト配置」での名前	フェーズ「動的モデリング」での名前	フェーズ「サブシステム」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
Withdraw Funds Function	機能	Withdraw Funds(UC) [1]					
Client Withdraw Funds Function	機能			Client Withdraw Funds(UC) [9]			
Server Withdraw Funds Function	機能			Server Withdraw Funds(UC) [9]			
Query Account Fuction	機能	Query Account(UC) [1]					
Client Query Account Function	機能			Client Query Account(UC) [9]			
Server Query Account	機能			Server Query Account(UC) [9]			
Transfer Funds Function	機能	Transfer Funds(UC) [1]					
Client Transfer Funds Fuction	機能			Client Transfer Funds(UC) [9]			
Server Transfer Funds Function	機能			Server Transfer Funds(UC) [9]			
Validate PIN Function	機能	Validate PIN(UC) [1]					
Client Validate PIN Function	機能			Client Validate PIN(UC) [9]			
Server Validate PIN Function	機能			Server Validate PIN(UC) [9]			
Add Cash Function	機能	Add Cash(UC) [1]		Add Cash(UC) [9]			
Startup Function	機能	Startup(UC) [1]		Startup(UC) [9]			
Shutdown Fuction	機能	Shutdown(UC) [1]		Shutdown(UC) [9]			
Bank	型		Bank(C) [2, 4, 5]				
BankingSystem	型		BankingSystem(C) [2]	BankingSystem(P) [8, 10]			
	実体					:BankingSystem(O) [27, 28]	
Customer	型		Customer(C) [4, 5]	Customer(C) [8]			
CustomerInterface	型			CustomerInterface(C) [10, 11]	CustomerInterface(C) [25]		
	実体				:CustomerInterface(O) [12, 13, 16, 17, 24]		:CustomerInterface(O) [29, 30]

表 B.2: 概念と UML 図式要素の対応表 (2/5)

概念	側面	フェーズ「要求」での名前 [描写された図面No]	フェーズ「静的モデリング」での名前	フェーズ「オブジェクト配置」での名前	フェーズ「動的モデリング」での名前	フェーズ「サブシステム」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ATMCustomer	型	ATM Customer(A) [1]	ATMCustomer(C) [2,3]	ATMCustomer(C) [8, 10]			
	実体				:ATMCustomer(O) [12, 13, 16, 17, 24]	:ATMCustomer(O) [27, 28]	:ATMCustomer(O) [29, 30]
Operator	型	Operator(A) [1]	Operator(C) [2,3]	Operator(C) [10]			
	実体				:Operator(O) [24]	:Operator(O) [27, 28]	:Operator(O) [29, 30]
OperatorInterface	型			OperatorInterface(C) [10, 11]	OperatorInterface(C) [25]		
	実体				:OperatorInterface(O) [24]		:OperatorInterface(O) [29, 30]
ATM	型		ATM(C) [2]				
	実体						
ATMInfo	型		ATMInfo(C) [4, 7]				
	実体						
ATMControl	型			ATMControl(C) [11]	ATMControl(C) [25]		
	実体				:ATMControl(O) [12, 13, 16, 17, 24]		:ATMController(O) [29, 30]
CardReaer	型		CardReader(C) [2,3]	CardReader(C) [8, 10]			
	実体				:CardReader(O) [12, 16, 24]	:CardReader(O) [27, 28]	:CardReader(O) [29, 30]
CardReaderInterface	型			CardReaderInterface(C) [10, 11]	CardReaderInterface(C) [25]		
	実体				:CardReaderInterface(O) [12, 13, 16, 17, 24]		:CardReaderInterface(O) [29, 30]
ATMCard	型		ATMCard(C) [2, 7]	ATMCard(C) [11]	ATMCard(C) [25]		
	実体				:ATMCard(O) [12, 13, 24]		:ATMCard(O) [29, 30]
CashDispenser	型		CashDispenser(C) [2,3]	CashDispenser(C) [8, 10]			
	実体				:CashDispenser(O) [16, 24]	:CashDispenser(O) [27, 28]	:CashDispenser(O) [29, 30]
CashDispenserInterface	型			CashDispenserInterface(C) [10, 11]	CashDispenserInterface(C) [25]		
	実体				:CashDispenserInterface(O) [16, 17, 24]		
ATMCash	型		ATMCash(C) [2, 7]	ATMCash(C) [11]	ATMCash(C) [25]		
	実体				:ATMCash(O) [16, 17, 24]		:ATMCash(O) [29, 30]

表 B.3: 概念と UML 図式要素の対応表 (3/5)

概念	側面	フェーズ「要求」での名前 [描写された図面No.]	フェーズ「静的モデリング」での名前	フェーズ「オブジェクト配置」での名前	フェーズ「動的モデリング」での名前	フェーズ「サブシステム」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
ReceiptPrinter	型		ReceiptPrinter(C) [2,3]	ReceiptPrinter(C) [8, 10]			
	実体				:ReceiptPrinter(O) [16, 24]	:ReceiptPrinter(O) [27, 28]	:ReceiptPrinter(O) [29, 30]
ReceiptPrinterInterface	型			ReceiptPrinterInterface(C) [10, 11]	ReceiptPrinterInterface(C) [25]		
	実体				:ReceiptPrinterInterface(O) [16, 17, 24]		
Receipt	型		Receipt(C) [2]				
Account	型		Account(C) [4, 5]				
	実体				:Account(O) [19]		
CardAccount	型		CardAccount(C) [4, 7]				
	実体				:CardAccount(O) [15, 26]		
CheckingAccount	型		CheckingAccount(C) [4, 5]				
	実体				:CheckingAccount(O) [26]		
SavingsAccount	型		SavingsAccount(C) [4, 5]				
	実体				:SavingsAccount(O) [26]		
DebitCard	型		DebitCard(C) [4, 5]				
	実体				:DebitCard(O) [15, 19, 26]		
BankTransactionServer	実体				:BankTransactionServer(O) [26]		
ATMTransaction	型		ATMTransaction(C) [4, 6]	ATMTransaction(C) [11]	ATMTransaction(C) [25]		
	実体				:ATMTransaction(O) [12, 13, 16, 17, 24]		:ATMTransaction(O) [29, 30]
WithdrawalTransaction Manager	実体				:WithdrawalTransaction Manager(O)[26]		
WithdrawalTransaction	型		WithdrawalTransaction(C) [4, 6]		WithdrawalTransaction(C) [25]		
QueryTransactionManager	実体				:QueryTransactionManager(O) [26]		
QueryTransaction	型		QueryTransaction(C) [4, 6]		QueryTransaction(C) [25]		

表 B.4: 概念と UML 図式要素の対応表 (4/5)

概念	側面	フェーズ「要求」での名前 [描写された図面No.]	フェーズ「静的モデリング」での名前	フェーズ「オブジェクト配置」での名前	フェーズ「動的モデリング」での名前	フェーズ「サブシステム」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
TransferTransaction Manager	実体				:TransferTransactionManager (O)[26]		
TransferTransaction	型		TransferTransaction(C) [4, 6]		TransferTransaction(C) [25]		
PINValidationTransaction Manager	実体				:PINValidationTransaction Manager(O)[15, 19, 26]		
PINValidationTransaction	型		PINValidationTransaction(C) [4, 6]		PINValidationTransaction(C) [25]		
TransactionLog	実体				:TransactionLog(O) [19, 26]		
ATMClientSubsystem	型			ATMClientSubsystem (C)[8] (P)[9, 11]			
	実体				:ATMClient(O) [15, 19, 24, 26]	:ATMClient(O) [27, 28]	:ATMClient(O) [29,30]
BankServerSubsystem	型			BankServerSubsystem (C)[8] (P)[9]			
	実体				:BankServer(O) [12, 13, 16, 17, 24, 26]	:BankServer(O) [27, 28]	:BankServer(O) [29, 30]
Idle	状態				Idle(S) [14, 18, 20, 21, 23]		
Waiting for PIN	状態				Waiting for PIN(S) [14, 21]		
Validating PIN	状態				Validating PIN(S) [14, 21]		
Waiting for Customer Choice	状態				Waiting for Customer Choice(S)[14, 18, 21]		
Terminating	状態				Terminating(S) [18, 23]		
Ejecting	状態				Ejecting(S) [18, 23]		
Printing	状態				Printing(S) [18, 23]		
Dispensing	状態				Printing(S) [18, 23]		
Processing Withdrawal	状態				Processing Withdrawal(S) [18, 22]		
Closed Down	状態				Closed Down(S) [20, 23]		
Processing Customer Input	状態				Processing Customer Input(S) [20, 21]		
Terminating Transaction	状態				Terminating Transaction(S) [20, 23]		
Processing Transaction	状態				Processing Transaction(S) [20, 22]		

表 B.5: 概念と UML 図式要素の対応表 (5/5)

概念	側面	フェーズ「要求」での名前 [描写された図面No]	フェーズ「静的モデリング」での名前	フェーズ「オブジェクト配置」での名前	フェーズ「動的モデリング」での名前	フェーズ「サブシステム」での名前	フェーズ「タスク設計」での名前
Processing Transfer	状態				Processing Transfer(S) [22]		
Processing Query	状態				Processing Query(S) [22]		
Confiscating	状態				Confiscating(S) [23]		

*(UC)…ユースケース、(A)…アクター、(C)…クラス、(P)…パッケージ、(O)…オブジェクト、(S)…状態

第 C章

UML1.5版における依存関係の定義

UML において，UML 図として描かれるシンボルやパスの意味は，UML メタモデルを構成するメタモデル要素の意味にマッピングされる．本章は，UML1.5 版における UML メタモデルの定義を紹介し，UML の表記とのマッピングを示す[1] ．

C.1　依存関係のセマンティクス

本節では，UML メタモデル要素 “Dependency” とそのサブクラスを紹介する．図 C.1 に，シンタックスの概要を示す．

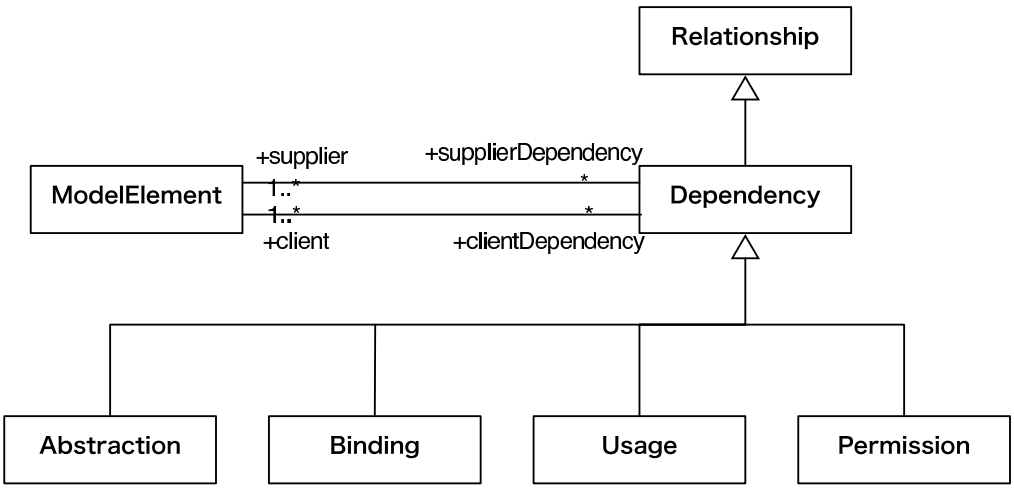

図 C.1: UML メタモデル：Core パッケージ-Dependencies([18] より引用)

[1] ここで使用する訳語は，文献 [18] によるものである．

C.1.1 Dependency

依存関係 (Dependency) は，要素 (群) の実装または機能が，他の要素 (群) の存在を要求することを示す．UML メタモデルでは，これはソースからターゲットへの単方向の関係であり，ソースはターゲットに依存することを示す．依存関係の種類は，抽象化 (Abstraction)，束縛 (Binding)，許可 (Permission)，使用 (Usage) である．これらのいくつかのステレオタイプは定義済みである．

C.1.2 Abstraction

抽象化 (Abstraction) は，異なる視点や抽象レベルで，同じコンセプトを表現している 2 つの要素や要素集合を結びつける依存関係である．UML メタモデルでは，依存関係と同じく単方向を示す関係だが，双方向になることもある．もし 1 つ以上の抽象的な (ソース側の) 要素があれば，ターゲットの要素はソースの要素集合へ写像する．

定義済みの抽象化のステレオタイプは以下の通りである．

- **derive**　ターゲットと，それから計算されたソースの関係を示す．
- **realize**　仕様のモデル要素や要素集合 (ターゲット) と，それを実装した要素や要素集合（ソース）の関係を示す．
- **refine**　分析段階と設計段階のような，抽象的な段階のモデル要素（ターゲット）と具象的な段階のモデル要素（ソース）の関係を示す．
- **trace**　抽象的な段階のモデル要素（ターゲット）と，具象的な段階で，ターゲットと同じコンセプトを持つモデル要素（ソース）の関係を示す．

C.1.3 Binding

Binding は，テンプレートと，それから生成されたモデル要素の間の関係であり，テンプレートパラメータに対応する引数のリストを含む．UML メタモデルでは，テンプレートがターゲットであり，テンプレートの実装がソースとなる．Binding は，ソースを得るために，ターゲットのパラメータを置換えた引数のリストを持つ．

C.1.4 Permission

Permission は，他の名前空間のモデル要素へアクセスする許可をモデル要素に許可することを示す．具体的には，この依存関係で繋がれたソースは，ターゲットの内容を参照する許可を持つことを示す．ただし，ターゲットは名前空間でなければならない．

定義済みの許可のステレオタイプは以下の通りである．

- **access**　ターゲットの名前空間にある公開された内容は，ソースの名前空間へアクセスできることを示す．
- **import**　ターゲットの名前空間にある公開された内容は，ソースの名前空間へ追加されたことを示す．
- **friend**　ソースとなるモデル要素は，公開宣言に関わらずターゲットとなるモデル要素へアクセスできることを示す．

C.1.5 Usage

使用 (Usage) は，ある要素が，完全な実装や操作のために他の要素または要素集合を要求することを示す．これは，単なる歴史的な成果物でなく，現在必要とするものを示す．そのため，Usage によって関係付けられた 2 つの要素は，同じモデル（段階）に属さなければならない．ソースのモデル要素は，ターゲットのモデル要素の存在を要求する．ソースがターゲットをどのように利用するかは，Usage のステレオタイプで定義される．

定義済みの使用のステレオタイプは以下の通りである．

- **call**　call の両端に接続されるものは操作またはクラスとなり，ソースはターゲットを呼び出すことを示す．
- **create**　あるシンボル（ソース）は，他のシンボル（ターゲット）のインスタンスを作ることを示す．
- **instanciate**　あるシンボル（ソース）の操作は，他のシンボル（ターゲット）のインスタンスを作ることを示す．
- **send**　ある操作（ソース）は，シグナル（ターゲット）を送信することを示す．

C.2　依存関係の表記

本節では，UML1.5 版の仕様書で定義された，破線の矢印で示される UML 図式要素を紹介する．

C.2.1　パッケージ間に利用される破線矢印

パッケージ間に描かれる関係は，そのパッケージ内の要素間の関係を示すために使われる．2 つのパッケージ間に張られる import や access の関係は，それぞれ ≪import≫，≪access≫ 付きで，開いた矢じりを持つ破線矢印で記述される．

C.2.2　インタフェースへの破線矢印

インタフェースは，その名前を持つ小さな丸で表現されることがある．この丸は，実線で繋がれたクラスが実装するインタフェースを示している．インタフェースが提供する操作を利用するクラスは，この丸へ向う破線矢印を利用して繋がれる．破線矢印は，クラスがインタフェースで定義された操作以上のものを要求しないことを示している．

C.2.3　オブジェクト間の破線矢印

異なる時間で同じオブジェクトの 2 つの値を結ぶ flow 関係は，それらのオブジェクトを結ぶ ≪become≫ 付きの破線矢印で示される．似ているものとして，≪copy≫ は，他のオブジェクトの値を用いた，新しいオブジェクトの生成に利用される．

C.2.4　依存関係

依存関係は，2 つのモデル要素間に貼り付けられ，矢印の終端側の要素が矢印の先端側の要素に依存する．依存関係には，いくつかの種類が定義されており，キーワードによって示される．定義されているキーワードは，access, bind, derive, import, refine, trace, use である．

C.2.5 InstanceOf

インスタンスとそのClassifier[2] 間に貼り付けられる破線矢印で，キーワード≪instanceOf≫を持つ．

C.2.6 ユースケース関係

ユースケース間を結ぶextend関係は，拡張を提供するユースケースから基底ユースケースへの，キーワード≪extend≫付きの破線矢印で表現される．また，ユースケース間を結ぶinclude関係は，基底ユースケースから包含されるユースケースへの，キーワード≪include≫付きの破線矢印で表現される．

C.3 依存関係の表記とセマンティクスの対応関係

前節までに紹介したUML図式要素のセマンティクスに対応する，UMLメタモデルの要素を以下の表C.1にまとめた．表C.1において，左よりUML図式の表現，UML仕様書におけるセマンティクスの対応に関する記述，対応するUMLメタモデル要素の順に並んでいる．例えば，最上段では，≪import≫付き破線矢印のセマンティクスは，UMLメタモデル要素のステレオタイプimport付きのPermissionに対応することを意味する．

ただし，図面上の表記において≪friend≫付き破線矢印のセマンティクスを示すUMLメタ要素は定義されていなかったため，説明文から推論した．

[2] UML仕様書で定義されたものであり，本論文で定義したClassifierではない

表 C.1: 破線矢印のセマンティクスを示すUMLメタモデルの要素

図面上の表記	マッピングに関する記述	マッピング先のメタモデル要素
<<import>>付き破線矢印	ステレオタイプimport付きのPermissionにマップする。	<<import>>付きPermission
<<access>>付き破線矢印	ステレオタイプaccess付きのPermissionにマップする。	<<access>>付きPermission
<<call>>付き破線矢印	キーワードがUsageのステレオタイプの1つならば、与えられたステレオタイプ付きのUsageへマップする。	<<call>>付きUsage
<<use>>付き破線矢印	Usageにマップする。	Usage
<<bind>>付き破線矢印	Bindingにマップする。	Binding
<<derive>>付き破線矢印	ステレオタイプderivation付きのAbstractionにマップする。	<<derivation>>付きAbstraction
<<refine>>付き破線矢印	ステレオタイプrefinement付きのAbstractionにマップする。	<<refinement>>付きAbstraction
<<trace>>付き破線矢印	ステレオタイプtrace付きのAbstractionにマップする。	<<trace>>付きAbstraction
<<friend>>付き破線矢印	(記述無し)	(<<friend>>付きPermission)
<<instantiate>>付き破線矢印	キーワードがUsageのステレオタイプの1つならば、与えられたステレオタイプ付きのUsageへマップする。	<<instantiate>>付きUsage
破線の汎化	クラスシンボルからインタフェースシンボルへの破線の汎化矢印、またはクラスシンボルとインタフェースサークルをつなぐ直線は、対応するClassifierとインタフェース要素の間のrealize付きAbstractionにマップする。	<<realize>>付きAbstraction
<<create>>付き破線矢印	キーワードがUsageのステレオタイプの1つならば、与えられたステレオタイプ付きのUsageへマップする。	<<create>>付きUsage
<<send>>付き破線矢印	キーワードがUsageのステレオタイプの1つならば、与えられたステレオタイプ付きのUsageへマップする。	<<send>>付きUsage